

GUNDAM BREAKER 3 —異界の模型戦士—

羽倉香澄

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

21世紀も半ばに差し掛かろうという近未来——ガンプラバトルは今や世界中が熱狂するスポーツとなっていた。

そんな中、生まれ育った商店街の復興に奮闘する1人の少女、ミサ。彼女がある日地元のゲームセンターで出会ったのは、凄腕のガンプラファイター、ヒカル。

ヒカルに秘められた秘密は、モビルスーツで戦争が行われている世界からやつてきたというもので――。

これは、ガンダムブレイカー2の世界からやつて来た主人公が、ガンダムブレイカー3の物語に挑む、激闘の記録である。

目 次

Chapter 1	Gundam	Cypher
第1話	ENCOUNTERER	CYPHER
第2話	PRACTICE	CYPER
第3話	EDGE	EDGE
第4話	JOY	JOY
第5話	UNLEASH	UNLEASH
第6話	CHASE	CHASE
第7話	STAND	STAND
第8話	AWAKE	AWAKE
第9話	BY	BY
Chapter 2	Gundam Cypher Advance	Gundam Cypher Advance
第10話	KNIGHT	KNIGHT

Chapter 1 Gundam Cypher

第1話 ENCOUNTER

天まで届く一筋の光。

宇宙と地球を結ぶ、軌道エレベーターが完成して1年になる。

21世紀もすでに半分が過ぎようとしている頃、人類はついに宇宙開発の歴史に新たな1ページを刻んでいた。人々は、自らの成し遂げたことに誇りを持っていた。

もつとも、民間による月面旅行や宇宙コロニーへの移住はまだまだ検討段階の話である。実現には最低でも四半世紀以上はかかるだろう、というのが大方の見込みである。

軌道エレベーターの民生運用が開始されたこの日。1人の少女は手元の携帯端末を見て、ひとつため息をついていた。

「週末は家族で月旅行、なんていうのもまだ先のが現実。私の現実は……毎日地元のゲーセン通いかあ」

その少女、ミサは自嘲気味の笑みを浮かべながら、そのゲームセンター、『イラトゲームパーク』に足を踏み入れるのだった。

「ミサさん、本日もご来店ありがとうございます」

イラトゲームパークに入店して出迎えたのは、人型のロボットである。ピンクと白を基調とした女性的なフォルムだ。ディープラーニング技術の発展によつて、高度なAIを搭載した作業用ロボット、ワーカボットは急速に社会に普及していく。インフオと名付けられたこの案内ロボットもそのうちの1体であり、人間との意思疎通も可能な高性能つくりである。

「毎日お出迎えありがとうございます、インフオちゃん」

「なんだい今日も来たのかい、悲しい青春送つてんねえ」

インフオに返事を返すミサに声をかけてくる老婆がいる。このイラトゲームパークの店主、イラトだ。

「一応お客様なんだから歓迎してほしいなあ」

「だつたらもつと金落としな。毎日いるだけじゃねえか。あの金髪の

あんちやん見習いな

「あの人は色々と規格外だよ」

イラトとミサが軽口を叩き合っていると、奥の方から子供が声をかけてくる。

「イラトばーちゃん！ このクレーンガバガバ過ぎて景品取れねえよ」

「黙りな！ 景品が取れることはちゃんとチェックしてるんだよ！」

子供のクレームに威勢よく言い返すイラト。だが、子供は首を横に振つて言い返す。

「インフォちゃんにチエックさせんな！ 人間にはミクロ単位の操作なんてできねえんだよ！」

当のインフォはミサと2人でイラトと子供の応酬を眺めていた。「ロボットにできるのは100%までだよ。人間だけが限界を超えて120%の力を……」

「聞いたことある台詞で煙に巻いてんじやねえ！ ちくしょう覚えてろよー!?」

子供は言い合いで勝てないと悟ったのか、捨て台詞を吐いて店から駆け出していくのだった。ミサは苦笑しながらそれを見送り、さて、と一言呟く。

「私、シミュレータ見に行くよ」

インフォに声をかけて、球体型の大型筐体が立ち並ぶ一角に向かおうとするミサに、インフォが声をかけて呼び止める。

「先程、初めてのお客様がシミュレータに入りました。そろそろプレイが始まる頃です」

その言葉を聞くと、ミサの表情がぱっと明るくなる。

「ホント!？」

そして、大型筐体のコーナー目掛けて駆け出すのだった。

ガンプラバトルシミュレータ。国民的な人気を誇るロボットアニメ、「機動戦士ガンダム」とそのシリーズ作品に登場する機体のプラモデル、通称「ガンプラ」を仮想空間上に投影して戦わせることが出来るゲームである。昔は大規模なイベントのみで遊ぶことが出来るも

のだったが、ついに業務用大型筐体としての普及が実現。各地のゲームセンターなどに続々と筐体が導入されていき、今や日本を飛び越え世界中で人気を博すゲームとなつた。

まだ全てのガンプラに対応出来ている訳ではなく、作品も現状「鉄血のオルフェンズ」までのものに限られているが、思い思いに自分が作つたガンプラを戦わせることができるのでこのゲームは、老若男女を問わず、幅広い人気を集めていた。

「あれかあ」

ミサの目に留まつたのは、今まさに大型筐体内で操縦桿を握りしめた人影である。遮光されているため、その風貌まではわからない。ミサは、プレイ状況を示す大型モニターの前に腰掛けると、そのガンプラが出撃するシーンを見守る。

「……んん？」

ミサは首を傾げる。画面の中でカタパルトに接続したその機体は奇妙な違和感があつた。

複数のガンプラのパーツを組み合わせて、いわゆるミキシングビルドが行われているのだが、塗装が一切されていない、出荷時の色プラ状態のままだつたのだ。

パーツ自体の色が統一されていればまだ違和感が少ないのだが、頭部と胴体が白と青のビルドストライク、腕部も白のレガンドムに青のGNソードを装着しているのに対して、下半身は漆黒の機体色であるスサノオであり、バツクパツクも黒いI W S P。このカラーリングのアンバランス感、そして重厚な上半身に対して比較的ほつそりとした脚部というフォルムも、ミサが違和感を覚えたポイントだつた。

「ほう、脚部をスサノオで構成するか……乙女座の私には、センチメンタリズムな運命を感じずにはいられない」

その声にミサが振り向くと、白いジャケットに身を包んだ金髪の青年が立つていた。

「ハムさん！…………でもいいの、仮にも社会人がこんな時間にこんなところで」

「もちろんよくはない…………が、今日はオフでね」

ハムさんと呼ばれた青年は片手を上げてそれに応える。

「さてミサ。……どう見る、あの機体」

「うーん……ガンプラ見る限りだと、ビルダー初心者なのかな。ファイターとしての腕がどうなのかは戦っているところを見てみないとだけど」

「同感だ。ガンプラの性能差が、勝敗を分かつ絶対条件ではないさ……見てみろ」

ハムさんが指をさす先では、当のガンプラが戦闘を始めていた。ステージは月面。重力が弱いこのステージを縦横無尽に飛び回りながら、GNソードを展開し襲い来るCPUのモブ機体を次々と切り払い、撃破していく姿に、2人は目を奪われる。

ウインドウの隅に表示された機体名は、「ブレイカーストライク・リペア」。

「……リペア？」

「さしづめ、脚部の代替パーツとしてスサノオを選んだということだろう。何らかの理由で本来のパーツを失ったか、あるいはそういう設定か……」

I W S P のレールガンが火を吹き、やや遠くからビームライフルの狙いをつけていたM G サイズのR X — 7 8 ガンダムを吹き飛ばす様を見つめながら、ハムさんの解説が続く。

「武装の多いI W S Pを見事に使いこなしている。ああいう武装はうまく使わないと持て余してしまうものだ。それを自在に操るとは……あの少年、ファイターとしては到底初心者とは思えんよ」

「……少年つて、顔も見てないのにわかるの？」

「ふつ……ガンプラの動きに、感情が乗っているのさ」

「はあ……さいですか」

独特的の物言いをするハムさんに、ミサはついていけないとばかりに首を振った。

そんな2人を他所に、ブレイカーストライク・リペアは一騎当千の戦いを続けていた。中遠距離の機体をビームマシンガンで牽制しつつ、動きを止めたところにレールガンや単装砲を撃ちこんで仕留め

る。接近してきた機体は2種類の実体剣——GNソードと二振りの対艦刀——を状況に応じて使い分けながら切り払っていく。その動きを支えるのがI W S P の高出力スラスターとスサノオの脚部だ。敵機の間を縫うように駆け巡りながら、的確に攻撃を当てている。

やがて、クレーターライクの開けた円形ステージに差し掛かつたその時、アラートが鳴り響いた。

「おお、どうやら対人戦が見られるぞ。ファイターとしての真価が問われるな」

「へえ、誰が戦うんだろ……」

ミサは画面に表示された対戦相手の名前を見やると、なんとも言えない表情になつた。

「あいつかあ……」

「あ、そつか、これ戦闘シミュレーターじゃなくて、ゲームだつたもんな」一方、ガンプラバトルシミュレータ内部では、当のブレイカーストライク・リペアを操る少年が我に返つたように手をぽんと叩いていた。

目の前に表示されたのは他プレイヤーの登場を知らせるアラート。続いて頭上に広がる宇宙空間から、1機のモビルスーツが降りてくる。ガーベラ・テトラをベースに、胴体などに若干の改造が加わった機体だ。カラーリングは金色をベースに、黒いランダムパターン。アクセントにカーキ色を配色している。

『おい、お前！ この辺じゃ見ねえやつだな』

表示された機体名はタイガーテトラ。その機体を操るファイターが、因縁を吹つかけてくるように声をかける。

『俺はタイガーフてんだ。この辺でガンプラバトルをするならよお、まずは俺に挨拶してもらわねえとな！』

いかにもステレオタイプなヤンキーめいた言い草に、少年の顔から苦笑が漏れる。

「凄いな……ホントにいるんだこういう人」

『おいこらテメエ、舐めてんのかア！ あア！？』

タイガーテトラは威嚇するように手に持ったマシンガンを突きつ

けてくる。と、その時、別の通信チャンネルが開いた。シミュレータ外部のオペレータ席からのように。オペレーションなんて頼んでないぞ、と少年が怪訝な顔をすると、

『あー、もしもーし、聞こえるー？ いきなりごめんねー』

通信相手の少女の声が聞こえてきた。いきなりの通信で非礼を詫びてくるあたり、目の前のヤンキーより好感が持てる。

「いや気にしてないよ、むしろ気が紛れた」

『それは何よりだよ。それよりも、今乱入してきたの、初心者狩りが趣味の、タチのわるーいチンピラなんだ。でも、そんなに強くないから安心して』

『お前、外から邪魔すんなよ！？』

タイガーと名乗るヤンキーは通信に割り込んできた少女に罵声を浴びせてくる。しかし少女はどこ吹く風と言った様子で受け流す。

『ああさあ、いい加減初心者に絡むのやめなよ。私が相手になるよ？』

『ふざけんなよ！ 僕は女には手を出さねえ！ 僕より強い女にはな！』

少年の口から「うわあ」と声が漏れた。あまりの言動に口角が引きつるのを感じる。

『いやあ……へタレだねえ……あー、君、さつさと倒しちゃつていいよこんなの』

「……あいよ」

気を取り直し、集中する。マシンガンと大剣、それがこのタイガーテトラの得物だ。マシンガンで牽制しながら大剣で強引に仕留めにかかる戦闘スタイルか。少年はそう判断した。

となれば、と思考を終え、少年は機体を動かす。単装砲をタイガーテトラの足元に向けて一発。即座に武装を切り替え、今度は前方にレールガンを一発。初撃の単装砲を避けようとしたタイガーテトラは、2段構えで放たれたレールガンをまともに食らって動きが止まる。

『んなアつ!? 初心者のくせにコスい手を……ツ!？』

タイガーが悪態をつきながら機体を立て直そうとすると、すでに至

近距離にブレイカーストライク・リペアが立っていた。GNソードを大きく上方向に振り抜いている。

数瞬の沈黙。タイガーは、自分の機体の左腕が無くなっていることに気がつく。

『……え?』

ドスン、という音。少し離れた場所に、さつきまでついていたタイガーテトラの左腕が転がっていた。

『速つ!?!』

『んなア!?』

『なんと!?!』

3人分の驚きの声が聞こえてくる。

「止まつて見えるよ」

対象的に、冷酷に告げる少年。

『てつめエ……ざけやがつてエ……!』

その挑発とも取れる言葉に、タイガーは怒りに任せて機体を突進させてきた。

『そんなア!』

すると、予備動作無しでGNソードが振り下ろされ、右腕も吹き飛ばされる。

『初心者がア!』

すぐさまGNソードを納刀、対艦刀でタイガーテトラの首を刎ねる。

『いるわけねエだろオオオオ……!』

そしてレールガンを接射。両足が吹き飛ばされ、各部パーツを撒き散らしながら、タイガーテトラの胴体は月面に叩きつけられた。

「そんなんじゃあ……長生きできそうにないよ、戦場では」

少年は一人呟くと、まだアーマーポイントの残っているタイガーテトラめがけて、GNソードを突き立てた。

『お、覚えてやがれ……!』

捨て台詞と共に、タイガーテトラはついに爆散した。

『BATTLE END ED』

ふう、と少年がため息をひとつついて、バトル終了のアナウンスを聞いた。

スキヤナーに置かれたガンプラを手に、球体のゲーム筐体から外に出ると、待ち構えていたのはミリタリージャケットを羽織った少女だ。先程の通信で茶々を入れてきたのはこいつか、と思う。

「やー、お疲れ！　君結構強いねえ」

「ほら、やはり少年ではないか」

その後ろでしたり顔をしている金髪の青年に、少女は苦笑する。

「ハムさんって時々妙に勘がいいよね。ニュータイプか何か？」

「ふつ……心眼を鍛えていると言っただけだ」

得意げな顔をする青年。それに曖昧な笑みで応えた後、少女は向き直る。

「あ、ごめんごめん、私の名前はミサ。初めまして、よろしくね。こつちはハムさん」

「ご覧の通り、社会人だ」

「はあ、ども。僕はヒカル、よろしく」

互いに自己紹介をする。ヒカルと名乗った少年は、ミサという少女とハムさんと呼ばれた青年を交互に見つめる。

「確かにこの辺じや見ない顔だけど……どつかのチームに入ってるの？」

と、ミサがそんな事を聞いてくる。ヒカルは少しだけ考え込んだ後、答えた。

「……いや、入つてないけど

「え、入つてない？　……コレはコレは好都合」

キヨトンとする少年に、ミサはやりと笑うのだった。

いつまでもゲームセンターにいるのもなんだ、というハムさんの提案により、3人はミサの家が経営しているという模型店に向かうことになった。

ハムさん曰く、「まずは君の機体をじっくりと見てみたい」ということである。

模型店に向かう道すがら、ミサは事情を話し始めた。

「どこから話そつか……私の地元は小さな商店街なんだけど、駅前に百貨店が出来てから、お客様が減っちゃってね」

「駅前の百貨店？　あのでっかいアレのこと？」

遠くに見える駅ビルを指しながら、ヒカルは聞き返す。

「そそ、タイムズユニバースって聞いたことがあるでしょ」

「タイムズユニバース？」

オウム返しに聞き返すヒカルに、ミサは仰天した。

「…………え、知らないの!?」

「世の中のこと疎くてね」

肩をすくめるヒカルに、ハムさんがなるほど、と頷く。

「少年、ニュースはチエツクしておくるものだぞ。タイムズユニバース……多角的に事業を展開する世界的な大企業だ。ミサの言った百貨店のような小売業のみならず、飲食業、住宅業、出版、コンピュータソフトウェア……様々な市場を席巻している。最近では宇宙開発事業にも乗り出していると聞く」

ミサはハムさんの解説に頷いた後、話を続けた。

「ま、そのタイムズユニバース百貨店が駅前にできて、ウチの商店街のお客さん、みんな取られちゃったんだ」

心なしか肩を落とすミサ。いつしか一行は、当の商店街——彩渡商店街にやつてきていた。かつては賑わっていたようだが、今はシャツターを下ろした店舗が目立ち、人の気配も少ない。テナント募集中、の張り紙が虚しく風に煽られている。

「そこで、私は商店街の名前でガンプラバトルチームを作つて、商店街の宣伝をしようと思いついたつてわけ」

「ああ。今やガンプラバトルは各種メディアを賑わせているからな。ガンプラバトルで有名になれば、一種の名所として人々も集まつてくれるだろう。ミサのご実家の経営も潤うだろうしな」

「そういうこと」

なるほどね、ようやく話が見えてきた、とヒカルは思う。

「つまり、この商店街のガンプラチームに入つてほしいってことね」

「正解！　是非とも我が彩渡商店街ガンプラチームに君をスカウトし

たいんだよ！」

こうして、1人の少年と1人の少女が出会った。

この出会いが、様々な人々の運命を巻き込んでいく物語の始まりになることを、まだ誰も知らない。

第2話 CYPHER

時は少しだけ遡る。

チトセ・ヒカルは、見た目はごく普通の少年だ。年齢17歳。身長は平均的で、やや痩せ型。少し長い黒髪をオールバックにしている。それくらいしか、個性をアピールするものはない。

だが、彼は「この世界」の人間ではない。

別世界——地球に住む人々と、宇宙に住む人々が果てなき争いを繰り広げる戦乱の世界、それがヒカルの故郷だった。

だが、彼をこの世界に放つた存在がいる。争いを終わらせるために、その身を散らし、精神体となつてまで尽力した1人の女性——シーナ・ハイゼンベルグだ。

全てをヒカルと共に終わらせた後、真っ暗な愛機のコツクピットの中で、シーナはヒカルにこう告げた。

「貴方は、これからは平和な世界で——貴方自身の夢を叶えてほしいの」

ヒカルは首を振る。

「僕は——僕には、夢がない」

ヒカルにとつて、戦いの中で生き伸びること、そして争いを終わらせること、それ自体が目標になつてしまっていた。それを叶えた今、もう自分には何もない。

「だつたら、見つければいい」「どうやって」

シーナとヒカルは問答を続ける。

「簡単よ。貴方にこの言葉を贈つてあげるわ。『夢は、果てしないから夢なのだ』……貴方が、生き続けている限り、夢は無限に広がつていく」

それが人間の特権よ、とシーナは言う。

「だから、貴方にきっと見つけられるはずよ。平和な世界で、いつか……また、逢いましょう」

シーナの声が遠ざかっていく。ヒカルは、暗闇に閉ざされたコックピットの中に光を見つけた。

光は、そのまま近づいてくる。ヒカルを包み込み、そして——その身が在る世界が変わった。

気がつけば、ヒカルはマンションの一室にいた。

「ここは……僕の、家?」

彼が元いた世界で、住んでいた場所と同じだった。だが、その肌に感じる空気はどこか違う。

マンションの窓から外を見る。気持ちのいい青空が広がっていた。色々と調べた結果、この街は、元いた世界の自分の生まれ故郷の「この世界の姿」ということがわかつた。東京都心から電車で20分の閑静な住宅街。何故か自分はこの地で一人暮らしをしていることになっていた。

「元いたこの世界の『チトセ・ヒカル』が、自分に置き換わつたってことか……?」

そう解釈しないと、今の自分の部屋から感じる生活感の説明がつかない。

とはいえ、学校に通つている様子もなく、何かで生計を立てている様子もない。幸い、部屋の中にあつた預金通帳には、今後3ヶ月程度は生活可能な蓄えがあることがわかつた。

しかし、その後はどうなるだろう。何かで生計を立てなければ、夢を追うどころの話ではない。こうして、チトセ・ヒカルは、この世界に身を置いて早々に、今後の自分の生活の安定化、ひいては職探しという極めて現実的な問題を抱えることとなってしまったのだつた。

そして、この世界に来て驚愕したことがもうひとつあつた。

自分の愛機たるモビルスーツ、ブレイカーストライク・リペアが、1／144スケールのプラモデルと化して部屋に飾つてあつたのだった。

「お前……なんでこんなにちっちゃくなつてんだよ」

ヒカルが元いた世界の兵器たちが、この世界では「機動戦士ガンダム」という人気アニメシリーズのキャラクターグッズとして続々とプ

ラモデルになつていることを知り、改めてここが「平和な世界」であることを思い知つた。

そんな中、このプラモデル——ガンプラを使って仮想空間上で実際に戦うことが出来るシミュレータがゲームとして存在することがわかつた。ヒカルは興味をそそられて、携帯端末で近場のゲームセンターを探し、そのゲームセンター「イラトゲームパーク」に向かう。それが、彼がガンプラバトルシミュレータをプレイしていた顛末だった。

ヒカルは今、そのゲームセンターで出会つた少女・ミサから、その腕を見込まれ、彼女にガンプラバトルチームへの誘いを受けていた。
(……夢を探す、か)

あの暗闇の中で、シーナに言われた言葉を反駁する。ミサの夢、商店街の復興を助けるのも良いかもしない。だが、その前に今の生活もなんとかしなければならない。

「——少しだけ、考えさせてくれないかな」

「大丈夫だよ。君の意志は尊重するから」

ミサは頷く。ハムさんもまた、そうだな、と同意する。

「ああ、性急に結論を出すこともないだろう。君の生活との兼ね合いもある。趣味というのは得てして金と時間がかかるものだ……」

話しているうちに段々と遠い目になつていくハムさん。ままならん、ままならんぞガンダム、とぶつぶつ呟き始めるハムさんを他所に、ミサは自分の家である模型店に入つていった。

「ただいまー」

ミサが店内の奥に声をかけると、バックヤードからピンクのエプロンをつけ、銀縁眼鏡をかけた男性が姿を現した。

「やあ、おかえり」

「あのね父さん……紹介したい人がいるの」

ミサはわざとらしく顔を赤らめながら、そう切り出す。だが、父親はそんなことを意に介す様子もなく、

「ああ、チームメイト見つかったのかい」

と、ミサの話を強引にぶつた切つてしまつた。

「いやまだ考えてもらつてる最中なんだけど……つてちがあう！もつとそこはこう、『き、君はまさか娘の……ぬうう許さんつ、表に出ろオ！』とか無いのー？」

「無いよ」

ミサの無茶振りをこれまたバツサリと切つて捨てる父親。呆れたような表情でひとつため息をつくと、父親はヒカルを見る。

「すまないね、強引に誘われたんだろう？……まあ、ゆっくり考えてくればそれでいいよ。ミサの父親のユウイチです。よろしくね」「いえ、お気になさらず……ヒカルって言います。よろしくお願ひします」

自己紹介をするユウイチに、頭を下げるヒカル。顔を上げると、店内を見渡す。様々な模型の箱が所狭しと棚に並べられており、レジ前のショーケースには、組み上がったガンプラたちが様々なポーズを取りつて壁に並べられている。

「おや、ハムさんもいらつしやい。ご注文の品、今日届きましたよ」「ほう……流石は店長。対応が早い」

即座に財布を取り出し、不敵な笑みを浮かべながら、ハムさんはレジへいそいそと向かう。その過程で、2つ3つガンプラの箱を棚から取り、持つていくのだつた。

「あ、父さん、奥の作業スペース使うね」

レジで会計対応に入る父親に声をかけると、ミサはヒカルを店内奥の作業スペースに連れて行つた。

「ところで、そのガンプラって自分で組んだの？」

作業スペースにガンプラを置く。ミサはためつすがめつ眺めながら、ヒカルに聞いてきた。

「……いや、貴いもの、つてどこかな」

ヒカルは答えた。元の世界で乗つっていた機体をガンプラとしてシーナから貰つた、という側面では間違つてはいないだろう、と内心思う。

「ふーん……」

ミサはパーツの可動範囲を確かめる。

その様子を見ながら、だが、とヒカルは思考を続ける。

この機体、確かに自分が乗っていたものだ。しかし、カラーリングが自分の記憶と違う。胸部を濃紺、バツクパツクを黒、他は白く塗り直していたはずだ。スサノオの脚部をつけたのは突貫工事とメカニックに聞いていたが、カラーリングだけは合わせてくれた事を覚えている。何故今、この塗装は剥がれてしまっているのだろう。

「ホントはこいつ、違う色に塗りたいんだけど……あと、バツも」「だろうな」

買い物を終えたハムさんが入ってくる。

「その機体、実のところかなりちぐはぐな印象があつた。確かにスサノオの脚部は優秀だ。だが、重装備の上半身を支える脚部としては頼りない」

コンセプトが違うのだよ、とハムさんは告げる。

「カラーリングもそうだが、いつそ組み直してみるのもありかもしけん」

「組み直す……」

「そうだ。ガンプラの可能性は無限大だ。パーツを付け替え、色を塗る。こうしてガンプラの世界は広がっていくのだ」

「どうか、とヒカルは頷く。しかし、ここでお金をかけるわけにもいかない。何しろ、3ヶ月先を見据えると、どうしてもここで一気に金を落とすわけにはいかないのだ。

「うーん……」

と、ヒカルがちらりと壁際を見る。バイト募集の張り紙があつた。「あー、実は、ここお父さんと私の2人経営なんだけど、どうにも手が回らなくなつてきて……」

「ミサ」

視線に気がついたミサが、バツが悪そうにそう言いかけると、それを遮る勢いでヒカルが口を挟む。

「今決めた。チームに入つてもいい」

「ホント!?」

「また急だな」

突然の意思表明にミサとハムさんが目を丸くする。

「ただし、条件がひとつ」

何を要求されるのか、とミサは身構える。

ヒカルは、さつと頭を下げた。

「ここで……働くかせてもらいたいんだ」

「あつはつは……そう来たか、むしろ歓迎だよ」

ユウイチはこの申し出を快諾した。

「父さん……悪いよいくらなんでも。チームに入つてもらうだけじゃなくて、バイトまでしてもらうなんて」

「と言いつつ、初っ端にチームに強引に誘つたのは誰だい？」

「ぐつ」

ミサはさすがに罪悪感を覚えて、父親に考え方直すように説得を試みるが、返された言葉には沈黙するしか無かつた。

「それに、うちの商店街の関係者が1人から2人に増えるんだ。商店街のガンプラチームとして、いいイメージ戦略になるんじやないか」「まあ……それはそうだけど」

「本当にすみません、ありがとうございます」

ヒカルは再び頭を下げた。

「ともかく、これでチームが結成できるんだ。タウンカツプの出場申込みもしたから、しばらく練習したりすると良い。休憩時間を使えばガンプラの調整なんかもできるだろうしね」

よろしく頼むよ、とユウイチはヒカルに笑いかける。その横で、ハムさんが立ち上がった。

「ならば、チーム結成を祝して、私から少年にプレゼントを贈ろう」

そう言うとハムさんは、店の棚から一つのガンプラを持ってくる。

「店長、追加の会計を頼む。私から彼にこれを贈りたい」

「良いんですか」

「構わん。若者のために投資は惜しまない主義でね。私とて年長者だ」

驚くユウイチを尻目に持つてきたガンプラは、「HGガンダムバルバトス」。「機動戦士ガンダム 鉄血のオルフェンズ」の主人公機だ。

「ありがとうございます、ハムさん」

「気にするな。まずはこれで、ガンプラ作成の基礎を学ぶと良い。出来たガンプラをベースに新たに機体を作るもよし、その機体の改造を施すもよしだ」

バルバトスの箱を受け取り、礼を言うヒカルに、ハムさんは力強く頷いた。

ミサが握手を求めてくる。

「……なんにせよ、ようやくチームが結成できるよ。これからよろしくね、ヒカルくん」

「ああ、よろしく、ミサ」

彩渡商店街ガンプラチームは、こうして結成と相成ったのである。ハムさんの指導の下、ミサの店の作業スペースでガンプラの製作が始まった。

「ゲートを残さないように切るのが肝要だ。ニッパーの背をパーツに当てる切る。覚えておくが良い」

「ヤスリは使い分けが肝心だ。目の粗いヤスリを使ってざつと処理をしつつ、細かいヤスリで仕上げにかかるのがベストだ」

「パーツは基本的にパチンとハマるように組む。ここが甘いとバトルの時に強度が落ちる。しつかり組んでおけよ」

ハムさんは手本として、自身が買ってきたHGユニオンフラツグを組み立てながら、ヒカルにガンプラのイロハを教えていた。

「これが……腕か」

「基本的に、四肢や胴体を作った後、最後にそれを組み合わせることになるな。ただ、組み合わせる前で一度作業を中断する」

ミサはその様子を見ながら、自分のガンプラの組み直しをしていた。

「今の機体もそろそろ限界が見えてきたし……前から作ろうと思つてアカツキベースで組んでみるかなあ」

そう咳きながら、HGアカツキの箱を開け、パーツを組み始める。

「ほう？ アカツキで作るのか？」

ハムさんはその様子を見て声をかける。

「前々から構想だけは練つて……後衛というか、戦闘支援ができる機体にしてみようつて」

「良いと思うぞ。チームでの戦いを前提としての機体構築はガンプラバトルの基本だからな」

一方のヒカルは、バルバトスの四肢を完成させていた。

「できました」

「いいぞ、ゲート処理もしつかり出来ている。それでこそだ少年」

ハムさんは頷くと、少し休憩を入れようと提案した。

「ところでハムさん、このバルバトスってどんな機体なんですか？ オルフェンズ見てなくつて」

実のところ、ヒカルはガンダム作品に触れているわけではない。元の世界に無い機体なので、興味をそそられたのだ。

「そうだな、かいつまんて説明すれば、作中世界において300年前の戦争『厄災戦』に使用された72体の『ガンダム』のうちの1機だ。相転移炉『エイハブ・リアクター』や、生体インターフェース『阿頬耶識システム』を搭載しており、フレーム構造が強靭でパイロットの生存性に優れる。作中では敵機から奪つたパーツを追加・換装しながら戦闘能力を高めていった」

さて、とハムさんはここで言葉を切り、ヒカルを見据える。

「私が贈つたこのバルバトスは、ガンプラの楽しみ方に相通する物がある」

「ガンプラの、楽しみ方？」

「そうだ。ガンプラの楽しみ方の一つ、パーツの追加や換装。専門用語でミキシングビルドという」

例えば、とグラハムはブレイカーストライク・リペアを指す。

「このガンプラ。頭部と胸部はビルドストライクで、腕部をレガンダムで構成している。脚部はスサノオ、そしてバックパックにIWS P。リペアと言うからには、どこかのパーツを何らかの代替パーツとして用いているのだろう？」

ヒカルは頷く。

「実は……このスサノオの脚は、ブレイカーストライク本来の姿じや

ない……って、作った人は言つていました

「だろうな。そう、それなのだよ。何らかのパーツを代わりに取り付ける。本来の姿とは別に。それが補修目的なのか、はたまた強化目的なのか、それを作った人間が解釈をそのガンプラに与える。そうすることで、そのガンプラに独自の物語が与えられる。同時に、改修を繰り返していくことで、オルフェンズの作中で激闘の物語を紡いだバルバトスのように、そのガンプラの物語は広がっていく。そうして出来たガンプラを、こう呼ぶ。

——『俺ガンダム』と

「俺ガンダム……」

ハムさんは、携帯端末を取り出し、様々な画像をヒカルに見せた。思い思いにカスタムされたガンプラ達の姿。その中に、一つとして同じカスタムは存在しない。

「ガンプラバトルシミュレータに現時点で対応している機体だけで100種類以上。パーツごとの組み合わせは実に、100億通り以上にもなる。100億通り以上のガンプラに、100億通り以上の物語がある。100億通り以上の歴史がある。可能性は、無限大だ」

ヒカルは、そのガンプラ達の姿に圧倒された。ただの兵器。自分の世界では、モビルスーツはそんな扱いだつた。この世界では、そのモビルスーツのプラモデルに、個々人が想いを、願いを、そして夢を込めている。

「——ハムさん、僕、やつてみます。その『俺ガンダム』で、チームのために戦います」

「そうだ、よく言つた少年。さあ、そろそろ続きに取り掛かろう。次はパーツごとの塗装だ」

決意を新たにしたヒカル。その眼に燃える熱意に打たれ、ハムさんの指導にも熱が入るのだつた。

数日後。

午前中から夕方頃までアルバイトとしてミサの店で働き、学校からミサが帰つてきたらガンプラの製作作業。その後、ゲーセンでトレーニングを積み、家に帰るという生活が始まつていた。

そしてヒカルは、一度作ったバルバトスのパーツを解体していた。

「こいつの一部を、新しいガンプラに組み込んでみようと思う」

「つてことは、ブレイカーストライクをベースにするの？」

取り外した四肢を眺めるヒカルに、アカツキのパーツを塗装していたミサが声をかける。

「一から作り直すほどイメージが固まつていらないんだ。だつたら、基本コンセプトはそのままで行く方がいいかなって」

バルバトスの脚を様々な角度から眺めながら、ヒカルは答えた。また、ブレイカーストライク・リペアも、その姿の写真を撮影した後に一度解体。様々なパーツの組み合わせを試していったのだつた。

そうして、数日間の試行錯誤を繰り返し、ついに彼の新しい愛機が完成した。IWSPやビルドストライクの上半身など、元のブレイカーストライクの面影を残しつつ、四肢をバルバトスのものに換装。手持ち武装をGNソードに一本化し、IWSPの圧倒的な制圧力とGNソードの高い切れ味を活かしながら戦うスタイルに変化した。

カラーリングも、かつて異世界で彼が乗っていた愛機、ブレイカーストライクに近い、白と紺に塗り替えた。ミサやユウイチに手伝つてもらいながら、スミ入れや若干のウェザリングを施し、ディティールアップも行つた。

「これが、本来の姿のブレイカーストライク？」

完成した機体を前に、ミサはヒカルに尋ねる。

「いや、僕はこの機体に新しい名前をつけるよ」

完成した自分の「俺ガンダム」。だが、この機体にはこれから歴史が蓄積されていく。今の空っぽの状態、いわば新たな原点。チトセ・ヒカルの新たな一步。

「今のこいつが、僕のスタート地点なんだ。だから、こう名付ける」

彼は、機体の名を呼んだ。

『サイファー』。ヒンディー語で『空っぽ』を意味する言葉。

——こいつの名前は、『ガンダムサイファー』だ！」

第3話 PRACTICE

タウンカップを1週間後に控えた土曜日。

新生したブレイカーストライク改めガンダムサイファーの実戦テストと、彩渡町タウンカップに向けた練習のため、ヒカルはミサと共にイラストゲームパークへと足を運んだ。

「まず、タウンカップの大会形式についておさらいするよ」

ミサは大型筐体前の待合スペースで彩渡町タウンカップの参加要項を広げ、説明を始めた。

「参加機体はHGサイズとMGサイズが1チーム4機まで。PGサイズが2機までで、モビルアーマーは1機だけ。多分PGとかモビルアーマーとか出してくるチームはいないとは思うけどね」

小さい大会つていうのと、アセンブルが面倒くさいのが理由だね、とミサが補足する。

「大会形式は、遭遇戦つて言うレギュレーションで行われるよ。ガンプラバトルシミュレータの基本的な形式だね。基本的にゲーセンで遊ぶときと変わらないから、安心して」

ヒカルは、ミサが指示した大会形式の項目に目を通す。

「……ゲーム開始と同時に各チームがフィールド内の別々のエリアに散らばつて、CPU制御の機体と戦いながらエリアを移動。他のチームと遭遇^{エンカウント}次第、対人戦が開始か」

「そそ。こないだ君がタイガーと戦つたときみたいなイメージだね。だから、ゲーセンはタウンカップの練習に打つてつけつて訳」

ミサの言うとおり、このガンプラバトルシミュレータは全国各地の店舗にある筐体がネットワークを通してリンクしており、他のプレイヤーとの遭遇戦を楽しむことができる。特にこの時期、各地でタウンカップが開催されていることもあり、遭遇戦において他チームとのエンカウント率は高まっている状態だ。

「このタウンカップを勝ち上がれば、各タウンカップの優勝者が参加できる、都道府県ごとのリージョンカップに出場できる。そのリージョンカップの優勝者が、日本一決定戦であるジャパンカップに招待

されるんだ」

なお、リージョンカップは東京都のみ、東東京大会と西東京大会に分けられている。これはガンプラファイター人口がひときわ多い東京都における競争率を抑えるための措置であり、東東京大会は東京23区、西東京大会は多摩地域に小笠原諸島を加えたエリアが該当する。とはいっても、ミサたちが挑む彩渡町タウンカップを勝ち抜いた先にある東東京大会は、別名『首都圏頂上決戦』と呼ばれる激戦区として知られている。この地域で2連覇はおろか、2回の優勝を果たしたチームでさえ、全日本ガンプラバトル選手権が始まつて以来、存在しないほどだ。

「まずはタウンカップに向けて練習だね。それじゃ……始めよっか」
ミサは自分のガンプラを手に立ち上がり、シミュレータの筐体に向かう。ミサの機体の名は『アザレア』。アカツキをベースとしてはいるが、主に射撃に重きを置いた改造が施されている。その象徴たる装備が背部のジヤイアント・バズ2門であり、ケンプファーのバックパックを転用したものであることがわかる。カラーリングこそピンク色を基調とした女性的なデザインだが、マシンガンやジヤイアント・バズから放たれる火力は侮れない。

「了解、やるか」

ヒカルも新たな愛機・ガンダムサイフナーと共に、シミュレータ筐体内に入るのだつた。

ヒカルは遮光されたアクリル製のドアから筐体の中に入ると、操縦席に座る。脇に据え付けられた3次元スキャナーに、ガンダムサイファーのガンプラをセットする。コインを投入し、タッチセンサーに自分の携帯端末を当てると、スキヤンされた機体データと、予め入力されてあるファイター情報・アセンブル情報が表示される。

ガンプラバトルでは、実際に組み上げた機体の各パーツの完成度や機体自体のスペックの他に、アセンブルシステムによる機体情報の設定を行う必要がある。模型店やゲームセンターに備え付けられているアセンブルシステムに、機体に搭載されるシステム——トランザムやゼロシステムなど——をインプットすることで、機体に独自の性格

付けを行うことが出来る。ガンプラそのものを組み上げるのがガンプラビルドなら、ガンプラの設定を組み上げていくのがアセンブルシステムだ。

ガンダムサイファーには、アセンブルシステム上で自己修復型マイクロマシンナリーテクノロジーを搭載し、継戦能力を高めている他、GNソードのライフルモード・ソードモードにもそれぞれ限界出力時のアクションが設定されている。

『Scanning has already complete
d.
You have control』

音声と共に画面内にスキヤンされたガンダムサイファーのグラフィックが表示される。背景はモビルスーツ運用母艦のカタパルトデッキだ。ガンダムサイファーはゆっくりと歩き、カタパルトに脚部を接続した。

ヒカルは操縦桿を握りしめ、宣言する。

「チトセ・ヒカル、ガンダムサイファー。オープニングバット！」

ガンダムサイファーのツインアイが輝き、カタパルトが急激に加速する。カタパルトから射出されたガンダムサイファーは、スラスターからアフター・バーナーの炎を煌めかせ、コロニーの空を飛翔するのだった。

コロニーの大地に降り立つたガンダムサイファーは、工業区域でミサが駆るアザレアと合流する。

『それじゃあまずは移動しようつか。多分この位置だと、資材搬入口から宇宙港に向かうコースになるね』

画面上にマップを表示させながら、ミサが通信を入れてきた。

『了解だよ。前方に敵機確認。ドラゴンガンダム3、ジム・コマンド

6』

工場が立ち並ぶ工業区の大通りに、9機ものモビルスーツが姿を現す。CPU制御のガンプラだ。ジム・コマンドの援護を受けながら、ドラゴンガンダムたちは接近戦を仕掛けようと動き出す。

『ようし、行くよつ！』

ミサはアザレアを前進させながら、集まつてくるドラゴンガンダム

に向かってジャイアント・バズを2発撃ち込む。

撃ち出された2発の360mm榴弾は、回避の遅れた1機のジム・コマンドにどちらも直撃。その爆風に他の敵機も巻き込まれ、木の葉のように吹き飛ばされた。

着弾地点より少し離れたドラゴンガンダムも、吹き飛ばされてきたジム・コマンドの残骸を回避しようとする。

が、間に合わない。巻き込まれるように地面に叩きつけられる。

瞬間、ガンダムサイファーが彼我の距離を詰めた。倒れ込んだドラゴンガンダムの両脚部をGNソードで斬り裂く。ガンダムサイファーの頭部バルカンが火を吹き、ドラゴンガンダムの上半身部は痙攣したかのように跳ね、火花が散る。推進剤に引火したのか、ドラゴンガンダムは火球と化して散つた。

その爆風を背中に受け、十分な初速を得た状態でさらにガンダムサイファーが飛翔する。そのツインカメラアイには、榴弾の爆心地から離れようとするジム・コマンド数機が捉えられていた。GNソードの射撃でこのうちの1機を撃破しながら、まだ態勢を立て直しきっていないジム・コマンド3機の只中に飛び込む。

ヒカルはここで操縦桿を一度引きながら、僚機であるアザレアと、現在の敵機の位置を確認する。

（むしろこつちがドラゴンガンダムを引きつけたほうが良さそうだな……）

ミサのアザレアは射撃戦で真価を發揮する。一方のドラゴンガンダムは、モビルファイターの例に漏れず格闘戦を前提とした機体であるため、アザレアの懷に入られるのは好ましくない。

「ジムの相手は任せた。残り2機のドラゴンガンダムを引きつける」

『了解っ！』

通信を交わすと、ジム・コマンドを見据えたまま後退。去り際に牽制のレールガンを撃ち込みながらその場を離脱し、アザレアを狙う1機のドラゴンガンダムの死角に回り込む。

ドラゴンガンダムは気づいていない。すかさずGNソードを展開し、切つ先を前に向けて突進する。

十分な速度の乗った一撃。突き刺したというよりも、轢かれたという表現がぴつたりの様相で、ドラゴンガンダムが横つ飛びに吹き飛んだ。

ガンダムサイファーが地面を蹴り、上昇する。ヒカルはガンダムバルバトスの脚部の換装の効果を実感した。スサノオの脚部に比べて、足回りが太くなり、脚部の剛性が上がったため、踏み込みの安定性がかなり上がっている。結果、より正確に跳躍できるようになった。脚を使つた格闘戦術も検討できるな、とヒカルは内心思う。

吹き飛ぶドラゴンガンダムを追いかけようと、GNソードを下から掬うように振り抜いて、空中へ打ち上げる。錐揉み回転しながら重力に引っ張られるドラゴンガンダムに、対艦刀が襲いかかる。抜刀と同時にの一撃、いわゆる抜き打ちである。空中で一刀両断されたドラゴンガンダムはただの一度の反撃も許されず、力尽きた。

そこへ追いつがる3機目のドラゴンガンダムは、形勢不利と見るや自らの機体を金色に輝かせ始めた。

(ハイパー modeか、ちょっと厄介だな)

GNソードのライフルモードで牽制弾を撃ちかけるも、それら全てを回避される。

接近戦を仕掛けるしか無いと判断し、ヒカルはブーストペダルを踏み込んだ。I W S P からアフターバーナーの炎が噴出し、金色に輝くドラゴンガンダムに肉迫する。

ドラゴンガンダムが拳を固めて殴り掛かる。ヒカルは勢い良くフットペダルを蹴つた。ガンダムサイファーが横に跳躍し、金色の拳を躱す。

真横から右腕を振り回しながらGNソードを展開、横薙ぎに一閃する。鳩尾に勢い良く当たり、ドラゴンガンダムは躰をくの字に折つた。レールガンを2発接射し、ついに最後のドラゴンガンダムは崩れ落ちた。

ミサのアザレアを見れば、ちょうどマシンガンで追い立てたジム・コマンドたちが密集しはじめたところだつた。そこへジャイアント・バズの榴弾を雨あられと浴びせ、ジム・コマンドたちをまとめて撃破。

このエリアに現れた敵影は全ていなくなつた。

『うんうん、いいペースだね』

「奥に進もう」

通信でミサと声を掛け合いながら、2機のガンプラはスラスターを吹かして奥のエリアへと向かうのだつた。

散発的に襲い来るCPUの機体を撃破しながら進撃し、2人が宇宙港のドックに差し掛かつたときである。

『ENEEMY PLAYER APPROACHING』

アナウンスと同時にアラートが鳴り響き、「他プレイヤーの介入を確認。襲撃に備えてください」というメッセージが画面上に表示される。

『来たよ！ 対人戦だ！』

宇宙港のドックの影から、3機のガンプラが飛び出す。1機は見覚えがある。黄色と黒のランダムパターンで塗装された、ガーベラ・テトラ。

「あいつ……こないだのヤンキーか」

1人呟く。機体名、タイガー・テトラ。残る2機も個性的であつた。1機は上半身をユニコーンガンダムとしながら、脚部をモビルホース・風雲再起で構成し、白と黒のボーダー柄で塗り分けている。もう1機は、ドーベン・ウルフをベースに、腕部をアルトロンガンダムに、頭部をバンシイに換装し、全身を金色に塗装した機体だつた。

機体名はそれぞれ、『ゼブラケンタウルス』『ゴールデン・レオン』。『おうおうおう！ タウンカツプ出場の練習かよオ！ ご苦労なこつたなア！』

通信ウインドウが開き、この間の「ヤンキー」——タイガーが歯を剥き出した表情で笑う。

『げえ、タイガー』

『あん時はちよつとばかり油断しちまつたが、今回は3対2、俺も本気よオ！』

タイガーが吠えるが、そこへもう1人、通信で割り込んでくる。

『おいタイガー。あいつかア、テメエを瞬殺したルーキーつて奴ア』

ドスの効いた、という表現が相応しい攻撃的な声色。通信ウインドウには、茶髪をライオンの鬍のように逆立て、三白眼で画面の向こう側から睨めつける青年がいた。

『すまねえなアお二人さんよオ。そこのタイガーが勝手に因縁つけちまつたみたいでなア。舍弟の不始末は兄貴分の不始末、俺が詫び入れることで手打ちにしてくれや』

だが、と鬍の青年は続ける。

『今はこつちもタウンカップに向けてならし運転中だア、悪いがそれとこれとは別つてことで頼んだぜ……行くぜ野郎どもオ！ チーム・

鎖蛮那亜仁魔流連合の意地見せてやるぜ夜露死苦ウ！』

『夜露死苦ウ！』

『ハツハウ！』

ゴールデン・レオンを先頭に、こちら目掛けて突っ込んでくる3機のガンプラたち。

『……何アレ』

ミサが目の前の不良3人チームを前にぽかんとした表情で固まっている。

「……サバンナアニマル連合？ でもトラつてサバンナに生息してなかつたはずだけど」

ヒカルが呟いたその瞬間、先陣を切つて今まさにビームサーベルを抜刀しようとしたゴールデン・レオンが……思いつきりコケた。

慣性の法則が生きているせいか、勢い良く頭から転倒したゴールデン・レオンは砂埃を上げて床を滑り、ヘッドスライディングの姿勢のままガンダムサイファーの足元で止まる。

『……あんだとオ？ トラがサバンナにいねエ？』

『ヘッド！ 惑わされないでください！ あのルーキーが俺らのメンタル抉りにかかつただけっす！』

果然と眩くリーダー格の鬍の男に、ゼブラケンタウロスを駆るスキンヘッドの男が慌ててフォローを入れる。

「いや、だつて、トラつて熱帯雨林に生息してるわけで、シマウマとかライオンみたいなサバンナ気候にはトラつて耐えられないし……」

『嘘こいてんじやねエぞルーキー野郎オ！ 動物園でライオンと仲良く肉食つてんだろうがア！』

タイガースはヒカルの解説を遮り、吠える。だが、スキンヘッドの男が悲しげな顔で頭を振つた。

『タイガースさん、動物園でもライオンとトラの檻は別つす。つまり……なんでタイガースさんこのチームにいるんすか』

『タイガーテメエ！ テメエのせいどんだ大恥かいてんだろうがよオ！ テメエが考えたチーム名だろうがア！ どう落とし前つけんだア、あア!?』

リーダーたる蠶の男の堪忍袋の緒が切れてしまつた。当のタイガースは「すんませんヘッド」と繰り返しながら悲惨な表情で頭を垂れるばかり。

しばらく、相手チームのリーダーの罵声と、スキンヘッドの男の仲裁のようで火に油を注ぐ言動、タイガースの恐縮しきつた謝罪の言葉がスピーカーから鳴り響き、

『あのお……ガンプラバトル、してもらえませんかねえ』

ついにミサがおずおずと声をかける。

『……ああ、すまねえなア。ちつとコイツは後でシメる。……行くぞ野郎どもオ!!』

ヤケクソのように叫ぶ蠶の男。幾分しよぼくれた様子で後に続くタイガース。ため息と共に愛機を走らせるスキンヘッドの男。

チーム・鎖蛮那亜仁魔流連合、降つて湧いたチームのアイデンティティの危機を振り払い、彩渡商店街ガンプラチームの前に立ちはだかるのであつた。

第4話 E D G E

戦闘の口火を切つたのは鎖蜜那亜^{サバンナ}仁魔流連合^{アニマルれんごう}であつた。部隊内チャットで何らかの指示を出したらしく、ゼブラケンタウロスとタイガーテトラの2機はアザレアに向けて射撃による牽制を行う。タイガーテトラの腕部マシンガン、ゼブラケンタウロスのビーム・マグナムが火を吹くが、アザレアは左右にステップを繰り返しながらこれを回避し、お返しとばかりにジャイアント・バズの2連撃を叩き込む。丁々発止の射撃戦が繰り広げられるが、両者の位置はゴールデン・レオン、ガンダムサイフナーの2機から徐々に引き離されていく。

「なるほど……1対1の勝負をご所望つてことか」

『俺の真価はタイマンで發揮されるんでなア。来いよオルーキー』

ゴールデン・レオンを駆る蠶^{たてがみ}の男が不敵に笑う。

「では——お言葉に甘えさせてもらうツ！」

数刻の睨み合いの後、ヒカルの台詞を合図に、両機地面を蹴り、互いの得物を手に飛びかかる。

ガンダムサイフナーが腕を横に振りながらGNソードを展開。そのままゴールデン・レオンを横薙ぎに一刀両断しようとする。しかし、ゴールデン・レオンは背中から巨大な対艦刀——ソードストライクガンダムの象徴たる大剣・シユベルトゲベルだ——を手に取るや否や荒々しく地面に突き立て、GNソードの刃を食い止めた。重い金属音が辺りにこだまする。

「反応はいいみたいだな……！」

『生身のケンカで慣れてんのよオ！　こんぐらいはなア！』

大剣同士の激突と粒子同士の干渉で、ガンダムサイフナーが仰け反る。そこへゴールデン・レオンの折りたたまれていた腕部が展開し、長く伸びてガンダムサイフナーへと迫る。アルトロンガンダムが持つ、伸縮自在の腕部から放たれる鉤爪の一撃。通称ドラゴンハングだ。

ヒカルはとつさに操縦桿を引き、ペダルを踏みつけた。仰け反つたまま滑るようにバックステップ。ガンダムサイフナーの胸元をドラ

ゴンハンギングがかすめ、擦過傷さっかしょうを作る。アセンブルシステムで設定した自己修復型マイクロマシンが即応し、装甲の擦過傷を修復に入る。

『そつちこそいい反応しやがる……！』

「まあこつちも色々慣れててね」

先程の言葉をそつくりそのまま返してみせた。

とはいって、格闘戦の間合いに入つた場合、ゴールデン・レオンが有利であることに変わりはない。リーチの長いドラゴンハンギングに、身の丈ほどもある大剣・シユベルトゲベール。こちらは四肢こそ剛性の高いバルバースのものとしており、多少の損傷は自己修復型マイクロマシンナリー技術によつて無視できるが、ドラゴンハンギングもシユベルトゲベールも直撃すればひとたまりもないだろう。腕や脚を失つてしまつては、マイクロマシンではどうにもならない。

後方に移動してやや間合いが開いたところで、GNソードをライフルモードに変更。大雑把に狙いをつけると、3連射する。

ドラゴンハンギングの構えに移ろうとしていたゴールデン・レオンは、攻撃の中止を余儀なくされた。

『ケツ、接近戦じや不利とわかつたら飛び道具かよ』

「状況判断力、と言つてほしいね」

売り言葉に買い言葉。ヒカルは悪態をつく鬱の男にそう返しながら、ガンダムサイファーを一度後退させる。ゴールデン・レオンもシユベルトゲベールを片手に追い込みにかかるが、GNソード・ライフルモードを連射して再び突き放す。

しかしヒカルは、その状況も長くは続かないことがわかつっていた。ライフルモードの弾は牽制目的のため、弾数はそう多くない。弾切れを起こした場合、ビームライフルの粒子の再充填を行うため、再度射撃が可能となる十数秒のクールタイムの間逃げに徹する必要があるが、アザレアに他の2機を任せている以上、あまり戦闘を長引かせるわけにはいかない。かと言つて、虎の子のレールガンや単装砲も弾数は多くない。ここぞという時に使用しなければ、効果的ではないだろう。

このままではジリ貧だ。一か八か接近戦を挑んでみるしかないか、

と思ったところで、ちらりとアセンブルシステムに入力した設定が頭をよぎる。ライフルモード・ソードモードの両方に設定してある、GNソードの限界駆動アクション。試してみる価値はあるだろう。

ガンダムサイファーは後退をやめて、GNソードをソードモードとした。目の前に、ゴールデン・レオンがまさしく獲物を前にしたライオンの如く迫る。

『鬼ごっこは終わりかアルーキー！　だつたらア、テメエのドタマかち割つたらア！』

左手のドラゴンハングが、ガンダムサイファーに伸びる。右手はシユベルトゲベールに手をかけていた。ドラゴンハングで引き寄せて大剣の痛撃を浴びせようというのだろう。

「ここだ！」

ヒカルの手が脇のタッチパネル式コンソールに伸び、武装オプションから「GNソード ソードモード限界駆動アクション」を選択。そのまま操縦桿を握り直す。

ガンダムサイファーの目が一瞬、強く輝く。大振りな動きで、GNソードを振り回す。だが、その剣先はゴールデン・レオンどころか、ドラゴンハングにすら届いていない。

『ハツハア！　焦つたかア初心者さんよオ！　この期に及んで間合いをミスるのは致命的だぜエ！』

その様子を見てとるや、勝ち誇つて嘲笑う鬱の男。

しかし、それでもなお、ヒカルは動じた様子がない。

「間合いはきつちり読んださ……その証拠に、この攻撃は当たった」

『何言つてやがんだテメエ……ッ!?』

鬱の男は、ゴールデン・レオンがアラートを放つてていることに気がついた。機体がダメージを受けている。目の前に迫る光の刃。伸ばしていたドラゴンハングは、ズタズタに切り裂かれていた。

『な、なアッ!?』

驚愕に目を見開く鬱の男。

「限界駆動アクション、クロススラッシュ……決めさせてもらつた！」

GNソードは、刀身にGN粒子を定着させることで切れ味を高めて

いる。だが、今のガンダムサイファーアーは、刀身の粒子定着力を弱め、さらにビームライフルと同様の指向性を持たせていた。このため、高速でGNソードを振ると、粒子が剥離し、光の刃となつて敵を切り裂くことができるようになる。その分、刀身に定着させたGN粒子を大量に消費するため、多用が出来ない。故に限界駆動アクションというわけだ。

『こつちのドラゴンハンギングを誘つてたつてことかよ……』

「かなりシビアなタイミングだつたけど……」

ゴールデン・レオンの左手が使えなくなれば、状況は一気に傾く。ガンダムサイファーアーは腰を落とすと急加速し、敵機に肉迫する。低い姿勢から、対艦刀でゴールデン・レオンの脚を斬りつける。

「……このコンバットパターンに持ち込めばこつちのものだ」

バランスを崩し、ゴールデン・レオンがよろめいて倒れ込む。ガンダムサイファーアーはそこへレールガンを叩き込み、衝撃で大きく跳ねたゴールデン・レオンの機体にGNソードを振るう。

腰から真つ二つに切り裂かれたゴールデン・レオンは、ついにその身を散らせた。

『つたく、とんでもねエルーキーがいたもんだぜ……タウンカツプは想像以上に本気で行かねえとキツそうだ』

『こつちもかなりギリギリだつたけどね……いい勝負だつた』

撃破された蠶の男は、満足げな笑みを浮かべていた。それに応えると、ガンダムサイファーアーが踵を返す。

「だが、あんたのチームは健在だ。勝負の決着はまだ決まってない……」

『そうだ、タイガーもゼブラもまだ生きてる。……おいルーキー、名前は』

『ガンダムサイファーアーをアザレアの援護に向かわせようとすると、蠶の男が名を問う。』

「——ヒカル。チトセ・ヒカルだ』

『そうかア、覚えたぜヒカル。俺の名はシドウ、シドウ・ゴウキだ。縁があつたら、また闘ろ^やうぜ』

「ああ、こちらも覚えた。また戦える日を楽しみにしてる」

ガンダムサイファードが地を蹴つて飛び上がる。強敵の名前を背に、

目指すは1対2の状況で戦いを続けるアザレアだ。

そのアザレアは、ゼブラケンタウロスとタイガーテトラの2機から絶え間なく押し寄せる弾幕を回避し続けていた。

『ちよこまか逃げ回りやがつて……！』

「ローゼン・ズールの脚部、正解だつたかなー」

ある程度の機動性と安定性の両立、そのためにミサがアザレアに採用したのがローゼン・ズールの脚部だった。ローゼン・ズールは上半身がマッシュブな、いわゆる逆三角形の機体シルエットであり、その上半身を支えるだけの安定性や、高い機動性を維持できているスラスター量などから、ミサはアザレアの脚部に採用したのだ。

「よつと」

相手の2機が接近したところにジャイアント・バズを叩き込み、接近を牽制する。

『道理でタイガーさんがビビる訳だぜ、こいつアなかなか骨が折れそうだ』

スキンヘッドの男——シドウからは『ゼブラ』と呼ばれていた——は、馬の脚部を活かした機動力でこれを躱しながら、ヒュツと口笛を吹いた。

『テメエはいちいち一言余計なんだよゼブラア！』

『おつと失礼、ついうつかり口が滑つて事実が』

口では言い合いをしつつ、タイガーとゼブラは射撃が途切れないよう連携を続けていた。タイガーの腕部マシンガン弾が途切れるタイミングで、ゼブラがビーム・マグナムを撃ち込む。逆にビーム・マグナムのリロード時間をタイガーがマシンガンを撃ち続けることで稼ぐ。結果、ミサはジリジリと追い込まれ始めていた。

「ちよつとマズいかなあ……」

ミサはチラリとレーダーを見やる。すると、離れたところでガンダムサイファードと一騎打ちをしていたゴールデン・レオンの光点が消えた。

『……ヘッドが落とされただとオ!?!』

『あのルーキー、化け物かよ!?!』

タイガーとゼブラの見るレーダーでもそれが確認できたのだろう、2人の驚愕の声が無線越しに聞こえてきた。そしてその一瞬、タイガートラとゼブラケンタウロスの動きが止まる。

「今だつ！」

ミサはその一瞬の隙を突いて、タイガーテトラめがけてありつたけのジャイアント・バズの榴弾を叩き込んだ。連続着弾に堪えきれず、タイガートラは煙を吹きながら後方に吹き飛び、地面に叩きつけられる。

『つ、しまつ——』

タイガーが慌てて機体を立て直そうとしたその時には、すでにアザレアが持つマシンガンの照準がタイガートラを捉えていた。

「どりやーつ！」

叫びながらマシンガンを撃ち尽くす。タイガートラの機体が引きつけを起こしたかのように跳ね、装甲にいくつもの風穴が開けられた。やがて撃墜判定が出され、穴あきチーズの如きタイガートラの残骸は戦場から消えた。

『タイガーさん！ チイツ……』

「残るはキミだけだけど？」

『まだ勝負はついちゃあいねえ。もつとも、ヘッドを落としたルーキーに合流されるとマズいがね……だからよオ』

ゼブラの言葉と共に、上半身のユニコーンボディの装甲が次々と展開、内部で赤く輝くサイコ・フレームを露出させていく。

『こいつあ奥の手だ……せめてテメエだけは落とさせてもらうぜ……！』

額の角が2つに割れ、バイザーで覆われていたガンダムフェイスが顕になる。これが、ユニコーンガンダムの真骨頂、デストロイモードだ。だが、変化は上半身だけでは終わらなかった。

下半身の風雲再起の脚部、これすらも金色に輝き始める。ハイパーモードをも同時発動させたのだ。上半身の赤い輝きにも、ハイパー

モードの金色が混ざり合う。

『ゼブラケンタウロス、ケイローンモードオ！　こいつのスピードに付いてこれるかア!?』

ビームトンファーザーを両腕から展開させ、勢いの乗ったギャロップ走法でアザレアに突進していくゼブラケンタウロス。その手の得物と、ガンダムフェイス特有のシルエットも相まって、ケンタウロスと言うよりも戦国時代の騎馬武者を思わせる。

アザレアはギリギリで1回目の突撃を回避し、マシンガンの射撃で応戦しようとする。だが、照準を定めることが出来ない。

「ロツクが追いつかない！」

『つはは、自慢じやねえが普段からナナハン乗り回してるんでねエ！　サーキットでがつたり走り込んだ経験はねエだろ嬢ちゃん！』

「あいにくレーシングゲームは亀の甲羅が出てくるやつしか……つ！』

アセンブルシステム上で、アザレアには高性能光学センサーユニットや高性能管制コンピューターなどを搭載させており、敵機を捕捉する照準速度や反応速度を向上させている。また、ミサ本人も動体視力は元々良い方である。しかし、今のゼブラケンタウロスはこれらを軽々と凌駕する速度で、縦横無尽にステージ内を駆け巡っていた。赤と金の輝きを後に残しながら、再度突撃を仕掛ける。

狙つて当てるの諦めるしか無い。ミサは手持ちのマシンガンで弾幕を張る。照準を定めずに一定の範囲内を弾丸で埋め尽くす。さしものゼブラケンタウロスも、何発か被弾する。が、それだけで勢いを殺すには至らない。

『ダラアアアアッ!!』

2回目の突撃もギリギリで直撃こそ避けることできたが、それ違いざまに斬りつけられたビームトンファーザーがアザレアの装甲をかすめた。装甲が泡立ち、溶解する。

『ディゾルブ属性の追加ダメージ……！』

『オラオラア！　張り切つて避けねえと、かすり傷じやあ済まねえぜ！』

「うう……まざいよー……」

ミサが頭を抱えたその時、視界の片隅に通信ウインドウが開く。

『ミサ！ ゴメン、遅くなつた！』

「ヒカルくん！」

ミサはウインドウに映つたチームメイトの顔に幾分安堵した後、レーダー上のガンダムサイファードを示す光点が、アザレアとゼブラケンタウロスの交戦ポイントに向かつているのを認めた。

『あと15秒耐えて欲しい、そうしたらなんとかできる！』

「15秒……わかつた！」

『よし、カウントスタート！』

ゼブラケンタウロスが3度目の突撃を敢行する。ビームトンファーの刃が煌めき、金と赤の輝きをその身に纏つて、一直線にアザレア目掛けて突っ込んでくる。

「だつたら……出し惜しみは無しだね！」

背中のジャイアント・バズを2門、肩に担いで構える。そして、弾倉が空になるまで一斉射。アセンブルシステムで設定した限界駆動アクション、マルチブラストだ。

『つ!? ここでバズーカの弾を全弾叩き込んできたア!?』

さしものゼブラケンタウロスも、この制圧射撃の前に動きが止まる。目の前で巻き起こつた爆風の嵐に、風雲再起の前脚が高く跳ね上がつた。

「よし、動きが止まつた！」

この隙を逃すこと無く、マシンガンに持ち替えフルオート射撃。弾丸はゼブラケンタウロスの装甲に次々と当たり、装甲を穿つていく。『つ、マシンガン!』ときで……つ!?』

ゼブラはここで異変に気がついた。ゼブラケンタウロスの被弾箇所、サイコ・フレームの露出箇所からアーク電流が漏れ出る。それまるで、猛獸を縛る鎖のように全身に絡みつき始めた。フレームが過剰に帶電しているのだ。

『このマシンガン、スタン属性持ちかよ!?』

「一旦動きを止めたら後はこっちのものだよ！」

ゼブラケンタウロスの機体、その全身からアーク電流が逆り、2本の手と4本の脚が痙攣する。

ゼブラが叫んだ通り、アザレアが持つマシンガンは弾頭と発射機構が特殊だった。セラミック製の弾丸に対し、発射の際に特定の圧力をかけることで表面電荷が発生する。これを圧電効果と言うのだが、こうして帶電した弾丸が内部機構に衝突することで、静電誘導もたらすが発生し、標的の半導体部品を破壊したり電気系統に不調を齎したりする。マシンガンに付与されたスタン属性はこのようにして発現するのだ。もちろん、一発一発の弾丸に帶電している電荷などたかが知れており、数発の被弾では効果が薄い。だが、フルオート射撃をまともに喰らい、数十発の弾丸をその身に受けてしまえば、内部構造の電子回路が機能不全に陥るほどの静電誘導を引き起_こすのだ。

「15秒稼いだ！ 動きもしつかり止めたよ！」

『オッケー、ありがとう……リチャージ完了、もう一度決める！』

アザレアが射撃の手を止めた次の瞬間、ゼブラケンタウロスの目の前に立つのは、ガンダムサイファー。GNソードを展開し、構える。『さて……猛獣狩りだ！』

スタン状態から立ち直る暇を与えたせず、GNソードの限界駆動アクリション・クロススラッシュが再び放たれた。指向性GN粒子の刃とGNソード本体の斬撃が、ゼブラケンタウロスの腕を、脚を、胴を、細切れに切り裂いていく。ゼブラケンタウロスのアーマーポイントはゼロを刻み、残骸と共に消滅した。

『ヘッド……すみません、やっぱ無理つした……』

『気にすんなゼブラ。むしろよく気張った。テメエの漢気、見せてもらつたぜ』

落胆するゼブラに、シドウが通信で労いの言葉をかける。

『いい戦いだつた、だがタウンカップじゃこうは行かねエ。腕を磨いてリベンジしてやるから待つてろよ……！』

シドウは最後に、ヒカルたちにそう告げると、通信を終えた。
「——ありがとう、ヒカルくん。一人で向こうのエース引き受けてもらつちやつて」

『いや、僕の方こそ。その分ミサが2機を相手取つてたから、ミサの方
が単純に負担大きかつたよね』

もつと上手いこと立ち回れば良かつたかな、と通信の向こう側で
ため息をつくヒカル。

「まあでも、結果的には勝てたんだし、終わり良ければ全て良しつて
ね。さ、練習続けるよ！」

2機のガンプラは、再び湧き出てきたCPU機を相手に戦いを続け
るのであつた。

「ふーっ、おっつかれー！」

練習が終わり、ヒカルとミサの2人はシミュレータの筐体から外へ
出て、思い思いに身体の関節を伸ばしていた。

「とりあえず、だいたいの感覚はつかめたかな」

「うんうん。これなら、タウンカップでもいい線行けそうだね」

聞けば、ミサが去年挑んだ彩渡町タウンカップでは予選突破が出来
ず、惜しくも敗退してしまつたとのことだつた。

「予選の形式が遭遇戦をこなしてポイントを稼ぐんだ。CPU機体を
倒すとポイントが入つて、対人戦で勝つと対人ボーナスが貰える。途
中で全滅すること無く完走すると、クリアタイムに応じてクリアボー
ナスが手に入る。これを全部足したチーム。ポイントの多いチームが、
決勝ラウンドに行けるんだ」

「去年は具体的にどんな戦術を？」

大会の順位決定について一通り聞くと、ヒカルが去年の様子を尋ね
る。すると、ミサはやや歯切れが悪くなつた。

「んー……出来る限り対人戦は避けて、可能な限り早くゴールするつ
て方針で進めたんだけど……対人戦もこなしてそこそこの速度で
ゴールした方が総合ポイントいいんだよね、この形式」
作戦ミスだつた、とミサは声色に悔しさを滲ませる。

「じゃあ取るべき作戦はひとつだね」

ヒカルはミサの話を聞いて、一つ頷いた。

「可能な限り最短で、対人戦が多くなりやすいルートを通る。これで
エンカウント率上げて、道中の対人戦は全部取りこぼさないようにす

る。これ以外に手はないよ」

ミサは息を呑んだ。

「……でもそれ、かなりキツいよ?」

「虎穴に入らずんば虎子を得ずって言葉がある。どうせやるなら——」

ヒカルは、まっすぐにミサの目を見て、宣言した。

「——参加者全員に勝つ勢いで行こう

タウンカップは1週間後に迫っている。

第5話 J.O.Y

タウンカツプまでの1週間、ヒカルたち彩渡商店街チームは猛練習を重ねていた。対人戦の戦術を練り、実戦でテストし、それが終わればすぐさま反省会とアセンブルの見直し。ミサの家で、父親であるユイチやハムさんも交えて検討会が続けられた。

「2人のガンプラとアセンブルは確認させてもらつたよ。ミサのアザレアが射撃重視なのに対して、ヒカルくんのガンダムサイファーアーは遠近両方で戦えるようになつていて。対人戦を重視するなら、ヒカルくんが1機ずつ確実に撃破していくことになるだろうね」

「同感だ。となれば、ファイトスタイルも鑑みるに、ミサは射撃による撹乱と支援に徹するのが良いだろう。仮に2対2の場合でも、2機で1機を集中して狙つっていくべきだ」

実際に机の上にガンプラを置きながら、ユイチとハムさんは戦術の基本方針を説く。

「ただ、その場合、敵機の片割れのマークが外れてしまうリスクは避けたい。というわけで、こんな戦術を取ろうかと思います」

ヒカルは敵機として置かれた2機のザクIIのうち片方の前に、ガンダムサイファーアーを置いた。

「まず、僕が前に出て片割れに仕掛ける。ミサはもう1機の動向を見て、こつちに来そうであればなるべく引き剥がして欲しい」

ミサは頷き、ガンダムサイファーアーの後ろにアザレアを置く。

「弾幕を張つたりすれば相手も近寄れないしね。で、格闘戦の合間にこつちがマシンガンで動きを止める」

ミサの手によつて、アザレアにマシンガンが持たされた。ザクに狙いをつけるような格好だ。

「相手の意識は基本、接近戦を仕掛けているこつちに向いているからね。その隙を狙つてマシンガンをスタンするまで撃ち込んで欲しい。こつちは一度射線から離れて、もう1機をレールガンと単装砲、ライフルモードで牽制する」

ヒカルが一度置いたガンダムサイファーアーの位置を僅かにずらし、ア

ザレアが構えるマシンガンの銃口から外す。腕を動かし、もう1機のザクに向けた。

「スタンしたら、またこつちが接近戦。アザレアは牽制に回る。これの繰り返しで、まず1機落とす」

そう言うと、片方のザクをうつ伏せに倒した。

「後は同じように、射撃と近接戦闘の繰り返しで落とす。複数体を相手にしない状況を常に作りつつ、各個撃破の流れに持っていくのが一番だね」

ヒカルがもう1体のザクをうつ伏せに倒しながら説明を終えると、ハムさんが頷いた。

「攻撃役と牽制役をスイッチしながら戦う、か。射撃支援に特化したアザレアと、どんな距離の相手にも回答を持たせているガンダムサイファーだからこそその戦術だな」

「もともと、ガンダムサイファー——いや、その前身であるブレイカーストライクは、どんな状況でも戦えるようにする、というコンセプト、らしいんです。GNソードのお陰で近接戦闘を主軸に戦うことにはなりますけど……僕の考えでは、モビルスーツの本懐は汎用性です」
ヒカルはガンダムサイファーを手に、力強く言い切った。

モビルスーツ。テレビアニメ『機動戦士ガンダム』の背景設定を紐解けば、地球連邦に比べて圧倒的に国力で劣っているジオン公国が開発した兵器である。ジオン公国の台所事情は厳しく、宇宙空間、コロニー内、空中、陸上などに特化した兵器を開発する余裕はなく、必然的に求められたのが、汎用性だった。パーツの換装や小規模な改修程度でどんな環境にも、どんな戦術にも対応できる。モビルスーツはそんな設計思想で生み出されたのだ。この設計思想は、ガンダムというハイエンドモデルの開発にも継承された。ビームライフルやハイパー・バズーカが^{もたら}齎す火力に、ビームサーベルやガンダムハンマーなどが繰り出す近接戦闘能力、堅牢な装甲や手持ちシールドによつて実現する防御力、そして高出力のスラスターが生み出す機動力。これらを全て兼ね備えたガンダムは汎用性を維持したまま、ザクを上回る性能を実現した。

ガンダムサイファーは、いわばその汎用性という面で、RX-78-2ガンダムの系譜に連なりながら、正統進化を遂げた機体となつていた。

「ガンダムサイファーという名を付けるにあたつては、私も一枚噛んでいたんだ」

ユウイチはガンダムサイファーを見つめながら、そう明かす。

「子供の頃から、いろんなガンダムを見てきた。ファーストガンダムからの宇宙世紀ものに、Gガンダムからのアナザーガンダム。いろいろなガンダムがいる。中には、ゴッドガンダムやエクシアのような格闘特化の機体に、ヘビーアームズやレオパルドのような砲戦特化、デュナメスのような狙撃機まで現れた。でもね、やっぱりガンダムの原点って、どんな状況でも戦える、どんな戦術でも戦える、そんな汎用性というか、万能選手っぷりだと思う。だから、その原点に立ち返った機体——そんな意味を込めた名前にしよう、という話をしてたんだ」

「サイファーーとは即ち、ゼロから全てを始める少年の決意。そして、スタンダードに立ち返ったガンダムの姿。その2つの意味が込められているというわけか」

ユウイチの話を聞いて、ハムさんが感慨深げに呟く。

「ミサのアザレアも、名前負けはしていないと思うぞ？」 アザレア——セイヨウツツジは、乾燥した土地を好んで咲く花だからね」

「荒野に咲く一輪の花ということか——今のミサにうつてつけのネーミングではないか」

ユウイチとハムさんの2人がミサの機体名を評するのを聞いて、ミサはただ頷いた。

「これからまた頑張らないといけないからね。今の私たちはチャレンジャーだよ」

さて、と一声置いて、ミサは立ち上がる。

「休みしたら、もう一度アセンブルの見直しをしようか！」

タウンカップまで、あと3日。ヒカルたち彩渡商店街チームは、決意も新たにタウンカップに向けて調整を重ねていく。

そして、タウンカップ当日。

ミサたちが参加する彩渡町タウンカップは、町役場に併設された市民体育館が会場となっていた。

体育館の中にはガンプラバトルシミュレータの筐体、O. R. B. S. (Over Reality Booster System) が運び込まれている。球形筐体が立ち並ぶ体育館は、独特の緊張感に包まれていた。老若男女問わず、思い思いに作成したガンプラを手に、自分の実力と愛機の性能を示そうとギラついた視線を走らせる。

「さあ諸君、間もなく予選開始だ。準備は大丈夫かな」

ハムさんはそう言うと、彩渡商店街チームのファイター2人に視線を向ける。

「こつちは問題なし。いつも通りやるだけですよ」

「同じく。去年は予選で負けちゃつたけど……今年こそ！」

ヒカルとミサはそれぞれ、力強く頷いた。

と、そこへ現れたのはいつぞやのヤンキー3人組、
鎖蛮那亜仁魔流連合サバンナアニマルれんごうだ。

「よお手前エラ。いつぞやの借りを返してもらいに来たぜ……このタ
ウンカップでなア！」

チームリーダーのシドウが啖呵を切る。

「こないだのようには行かねエ。俺達は手前エらに負けてから、機体のセッティングとアセンブル、それに戦い方まで全部研究し直したんだ。同じ手は二度と通用しねエぜ」

そう言うと、シドウはケースから自分のガンプラを取り出し、掲げる。その金色の機体は、以前の姿から大幅なカスタマイズが施されていた。

「このゴールデン・レオン・レックスに誓つてなア！」

バンシーの頭部とユニコーンシリーズのボディをそのままに、腕部をガンダムヴァーサーゴ、脚部をガンダムエピオンとしている。背部には対ビームコートティングマントを羽織り、さらにその上からバンシィ・ノルンのバックパックが装着されている。腕部にはメガガトリ

ングガンが装備され、より重厚なシルエットに仕上がっていた。

「始まる前から手の内を明かすとは……余程の自信か」

ハムさんはシドウの行動に息を呑む。

「当然よオ！俺たちだつてこの大会を勝ち上がり、首都圏頂上決戦に名前を刻むんだ……！」

「シドウ、タイガー、ゼブラ……鎖蛮那亜仁魔流連合の名前をなア！このタウンカップはその通過点だぜ！」

タイガー、そしてゼブラもまた、自分たちの機体を掲げる。いかで改造が施されており、タイガーテトラはより砲戦に特化した装備となり、ゼブラケンタウロスはバックパックをエールストライカーパックに換装、より機動力が上がっている。

「タイガーサンはなあ、あれから心を入れ替えたんだ。ヒカル……あの時ルーキーだつたテメエに叩きのめされ、さらにヘッドの雷が落ちた。だが、お陰でタイガーサンは目を覚ました！今のタイガーサンはもうこれまでのタイガーサンじやねえんだよ！」

感極まつたのか、ゼブラは声を震わせる。

「ああ……もう初心者狩りは封印したア！あの時の、情けねエ動物園の虎はもういねエ……過酷なサバンナで生き抜く野性を磨いたんだよオ!!」

タイガーは歯を剥き出して吼える。ヒカルはその目つきが、以前と明らかに違うことを認めた。

「なるほどね……」

ヒカルは一つ頷く。

「じゃあ僕も一つ教えよう。同じ手はそう何度も使わない。僕達の戦い方が同じだと思ったら……」

ヒカルはここで言葉を切り、ミサに視線を投げる。ミサはその視線を受け止め、真っ向からシドウ達3人の前に仁王立ちした。

「大間違いだよッ！」

シドウは自分たちの闘志を真っ向から受け止めた彩渡商店街チ一ムの2人に獰猛な笑みを以つて、宣戦布告とする。

「そうかい……まあ御託はそろそろいいだろ。戦場で、待ってるぜ」

シドウ達3人が去ると、入れ替わるように1人の少年が現れた。軽薄そうな顔つきに、皮肉っぽい笑みを浮かべている。

「おやおや……ようミサ。新しいチームメイトは……見つけたつてどこか」

ミサはその少年を見るや、露骨に顔をしかめた。

「誰かと思つたら……カマセ君。その様子だと新しいチーム、見つけたんだね」

どうやらこの2人は顔見知りらしい。ヒカルにはこの2人がどういう関係か、ある程度推測がついていた。

「知り合い？」

念のためにヒカルが聞くと、ミサはため息混じりに、短く説明する。

「去年のチームメイトだよ」

「結局抜けさせてもらつたけどな。このチームは俺の性に合わなくてね……今のチームは最高さ。資金と技術があるところは全然違うね」ミサの言葉を受け、カマセは軽薄そうな笑みを浮かべながら補足する。やつぱりね、とヒカルは内心呟く。去年の敗戦がきっかけであまり後味のよろしくない形での脱退劇があつたということだ。しかも、カマセ側の一方的な事情によるもの。

「おい新入りい。こんなところで油売つてないで、さつさとセッティングしろお」

そこへ声をかけるのは、白衣に無精髭といった出で立ちの男性だ。髪も無造作に伸び気味で、研究一筋の技術者といった風体である。年の頃は三十路過ぎだろうか。

「わかってるよ！ 元チームメイトに挨拶してたんだ！ ……じゃあな、ミサ。それにそのチームメイト。決勝まで残れるといいな」皮肉げな笑みを崩さず、カマセは嫌味を言い置いて立ち去る。男性はそれを呆れたような目つきで見送ると、彩渡商店街チームに向き直つた。

「すまねえなお嬢ちゃんがた。邪魔しちまつて」

ミサはとんでもない、と首を振る。

「いえ、むしろありがとうございます……えつと」

「おおつと失礼。俺はハイムロボティクス・チームエンジニアのカドマツだ」

男性は肩書と名前を名乗る。と、ヒカルとミサの背後に控えるハムさんに気がつく。

「あれ、ハムさん。こんなところで会うなんて奇遇だねえ」

「久しいなカドマツ。7年前の大会では世話になつた。あれからチームはどんな様子かな？」

ハムさんが聞くと、カドマツは照れくさそうに頭を搔く。

「お陰さんで、一昨年から2連覇だよ。ただ去年までのファイター、引退しちゃつてさ。お子さん産まれちゃつて。しばらく子育てに専念するそうだ」

その報告に、ハムさんは幾分残念そうな表情を浮かべる。

「そ、うか……めでたい話だが、彼の戦いがもう見れないのは残念だな」

どうやら今度はハムさんとカドマツが顔見知り同士のようだ。昔話に花を咲かせる2人を眺めながら、ヒカルは小声でミサに話しかける。

「……ハイムロボティクス？」

「ああ、ヒカル君は知らないんだつけ。このあたりじゃロボット製造で有名なんだ。インフォちゃんもあそこが作つてるんだよね。ロボット制作の技術研究とかで、ガンプラバトルもやつてるみたい」

そういうアプローチでガンプラバトルをする人もいるのか、ヒカルは驚く。そんな若者2人に視線を投げながら、カドマツは話を続ける。

「いやあ……今年は心機一転して、中高生をチームに迎えようと決めたはいいんだが、やつて来たのは見ての通りの問題児でね……腕はいいんだがなあ」

「心中お察しします……」

ミサも同様にため息をつく。

「若いうちからそう^{たそが}黄昏れなさんな……と言いたいが、その気持ちは俺にもわかる。痛いほどわかる……。んじゃ、俺も仕事あるんで」

カドマツは片手を軽く振りながら、カマセの後を追つて立ち去つ

た。

「カマセ、ね……ああ言う手合いは人間的にあんまり好みじゃないな……」

カマセとカドマツが去つていった方角を眺めながら、ヒカルは1人呟く。

「……でも、パイロットとしてはどうかな」

誰にともなく言葉を紡ぐヒカルの目つきは、どこか鋭くなるのだった。

予選の開始直前に、ヒカルとミサ、そしてハムさんは最後のブリーフィングを行っていた。

「我々がまず通過しなければならないのがこの予選だ。最初の壁となるだろう。だが、敢えて言わせて貰おう。ここはただの通過点に過ぎない！」

「その通り。私たちはこの予選を勝ち抜いて、決勝に進まなきやいけない。そして、今の私達ならそれができるはず！」

ハムさんとミサはそれぞれ、決意を口にする。

「ああ、そうだ。……ハムさん、あの技の伝授、ありがとうございます」「ふつ……君ならできると信じて教えた。ガンダムサイファードが実戦で披露する姿、楽しみにしているぞ、少年！」

一礼するヒカルにハムさんは頷くと、拳を突き出す。2人もそれに倣い、互いの拳をぶつけた。

「新生彩渡商店街チームの晴れ舞台だ。思う存分駆け抜け抜けてこい！」
「はいっ！」「了解っ！」

ハムさんが見送る中、2人はガンプラバトルシミュレータの筐体の扉を開けた。

ヒカルはシートに座り、ガンダムサイファードをシート脇の3次元スキャナーに読み込ませる。携帯端末をシートに据え付けられたセンサーにかざすと、画面に機体情報が表示された。

「やつと、僕を動かす感情がわかつた」

先週シドウと戦った時、どうしようもなく血が騒いでいた。強敵との戦い。やるかやられるかのせめぎ合い。自分は未だに、どうしよう

もなく戦いを望んでいる。血湧き肉躍る戦いを。

「そうだ……僕は、やはりこの期に及んでも……戦いの中で、自分を見つけられる！」

3次元スキャナーナーのガンダムサイファードを見る。ちょうどガンダムサイファードがこちらを見返す格好だ。カメラアイが心なしか、キラリと輝いたように見えた。

「行くぞ、ガンダムサイファード。共に分かち合おう、戦い続ける歓びを……！」

目の前の球形スクリーンに映し出されるモビルスーツ母艦のカタパルト。ガンダムサイファードは、そのカタパルトに接続された。

ヒカルは口元に笑みを浮かべ、宣言した。

「チトセ・ヒカル、ガンダムサイファード。オープニングバット！」
『Battle Start!!』

合成音声が宣言に応えるように、ガンプラバトルの開始を告げる。ガンダムサイファードがカタパルトから射出され、大空に飛び立つ。眼下には密林と大きく蛇行する大河。南米大陸の連邦軍基地、ジャブローを模したステージだ。

しばし、空中を舞うガンダムサイファード。その姿はまるで、ヒカルが感じる高揚感を映しているかのようだった。

第6話 U N L E A S H

ジヤブローの密林に降り立つたガンダムサイファーとアザレア。2機のパイロット、ヒカルとミサはマップを確認する。

『ここからだとゴール地点の最短ルートは……まず川に出てから川沿いに上流に向かって、第6ゲートから地下基地に入ればいいかな。そこから戦艦ブランリヴァルのドックを目指す形になるね』

「O.K。じゃあ一気に行こう」

ルートを確認すると、2機は迷いなく川沿いに出る。待ち構えていたN P C 機体の陸戦型ガンダムの1個小隊がマシンガンを齊射し行く手を阻むが、

「邪魔だよ！」

その間隙を縫うように飛び出したガンダムサイファーが、すれ違いざまにGNソードを一閃。2機の陸戦型ガンダムは、腰から真つ二つに両断されてしまった。

『いつただきい！』

その後ろでは、ミサのアザレアが別の陸戦型ガンダムをマシンガンで蜂の巣に変えていた。

陸戦型ガンダムの小隊を全滅させたところで、アラートが鳴る。早速他のチームと出くわしたらしい。

密林から飛び出してきたのはガンダムAGE-12 ダブルバレットの改造機と、GNアーチャーの改造機だ。どちらの機体も射撃戦主体らしく、ダブルバレットはストライクノワールのビームライフルショーティを、GNアーチャーはデュエルガンダムのビームライフルを2丁ずつ持っている。

『アザレア……つてことはミサのチームか！』

『カマセ君に代わる新しいチームメンバー、見つけたみたいね』

通信ウインドウに表示されるのは、バンダナを頭に巻いた活発そうな少年と、眼鏡をかけた黒髪の少女だ。

『あー！ 生徒会と新聞部のバカツプル！ 別名マスコミと行政の癒着！』

アザレアが2機を指差すと同時に、ミサが叫ぶ。

『うるせえ！　俺達は公私混同しない主義なんだよ！　なあセイナ』
『そうよ！　T P Oくらい弁てるんだから！　ねつ、アキタカあ』
ダブルバレットの少年・アキタカと、GNアーチャーの少女・セイナがミサの台詞に抗議するが、最後に名前を呼び合う時、お互い声色が微妙に艶っぽくなっているのをミサとヒカルは聞き逃さなかつた。

「……なんか腹立つな、アレ」

ヒカルはぼそつと呟くと、GNアーチャー目掛けて突っ込んでいった。

「お喋りも何だし始めるよ。パターんAで。フエイズ1スタート」

『……ちよつ、早いつてつ』

突っ込んでいくガンダムサイファーを見て、アザレアも慌ててマシンガンを構えた。

ミサの脳裏には、彼ら2人と、半年前に交わした会話がフラツシュバツクしていた。

ミサの通う彩渡北高校は、その日、全ての授業を終えて放課後を迎えていた。

カバンに荷物をまとめて帰宅を始めるミサの顔色はどことなく優れていない。チームメイトであるカマセ・ケンタからチーム脱退の申し入れがあつたのがつい先日のことで、未だそのショックから立ち直れずにいた。

「はあ……来年、どうしよう……」

「何しよげてんの、ミサ」

そんなミサに声をかけてきたのが、生徒会長としての活動を正式にスタートさせたクルス・セイナだつた。

「セイナちゃん……」

「聞いたよ、チームのこと。流石にアレはどうかしてるわ、カマセのやつ」

「ごめんね、そつちのチームに入る話蹴つてまで、自分のチーム作つておいて……情けないよね」

憤慨するセイナに、ミサは弱々しく微笑む。

「いいの。ミサのところの事情を知っちゃうとね……ミサの分まで私達が頑張らなきやいけなかつたんだけど

私達も力不足だつた、とセイナはため息をつく。

「でも、こんなところで終われねーだろ?」

話に入つてくるのは、新聞部に所属するクラスメイト、コウゲツ・アキタカだ。廃部寸前の新聞部を立て直し、全国コンクールで優秀賞を取るまでの部活に成長させた敏腕部長である。

「俺だつて、先輩が全員卒業したにも拘らず、部員が俺一人だけになつた時はすごく凹んださ。でも、だからこそ、ここが踏ん張りどころなんだよ。ゼロからもう一度始めればいい。まだ、間に合うんだ」

アキタカはそう言つて、ミサに笑いかけた。

「ふふつ、アキタカつて、崖っぷちに追い込まれた人見ると放つとけないのよね」

「シンパシーツてやつさ」

セイナとアキタカが顔を見合わせて笑い合う様子を見て、ミサの表情から翳り^{かげ}が消えた。

「セイナちゃん、アキタカくん……ありがとう。まだ頑張れそだよ」「良い相方、見つかると良いね……もちろん、私達も探してみるから」

セイナはミサの肩を叩いて、力強い笑顔を向けたのだつた。

『無事相方が見つかつたのは本当に嬉しいんだけどね……っ!』

ミサは意識を現在に戻した。セイナの苦笑交じりの声に交じり、ガンダムサイファードが放つGNソード・ライフルモードの射撃音が響く。

『くうつ……ミサ、貴女の新しいパートナー、がつつき過ぎよ!』

GNソードを構えながら突進するガンダムサイファードにビームライフルを連射するGNアーチャー。後退しながら射撃を行う、引き撃ちというテクニックだ。相対距離を出来る限り維持して、間合いを取つて いる。

『ちいつ……セイナつ!』

ダブルバレットはガンダムサイファードにドッズキヤノンを撃とうと狙いをつけるが、それを妨害するようにアザレアのマシンガンが火

を吹いた。

「させないよつ！」

『うおおつ！？……マズい、完全に先手を取られた！』

だが、追い詰めるに至らない。GNアーチャーは機体重量が軽い上に、各部にスラスターを増設した結果、大型のスラスターを持つガンダムサイファーアー以上の速度を出していた。

『駄目だ、追いつけそうにないな……ミサ！ フエイズ2！』

「了解つ！」

アザレアはジャイアント・バズをダブルバレットに撃ち込むと、すぐさまマシンガンを構え直す。ガンダムサイファーアーは逆にGNアーチャーに対して、GNソードをライフルモードに変え、引き撃ちを始めた。

『つ、接近戦を諦めた？ ならつ……攻守変更！』

GNアーチャーは後退を止め、前進しながらガンダムサイファーアーを追いかどする。その時、アザレアのマシンガンの洗礼を受けた。

「貴いつ！」

『嘘でしょ！？ さつきまでアキタ力と戦つてたはず……ツ！』

アザレアのマシンガンの洗礼を貰い、GNアーチャーは再度引き撃ちに戻る。それを追うミサ。

『援護はまだ!?』

セイナが悲鳴に似た声を上げる。だが、助けを求めた先のダブルバレットは、目の前に突然襲い掛かってきたビームの奔流を前に、後退を余儀なくされていた。

『すまねえ駄目だ、今度はストライクが邪魔してくる……くそつ、近づけない！』

『そんな……！』

2人の声色に焦りが滲む。そして、アザレアのマシンガンの効果が効き始めた。散発的にスタン属性の弾を食らっていたGNアーチャーが、ここへ来てついにスタン状態に陥つたのだ。

『う、動きなさいよ……！』

その様子を見るやいなや、ミサはヒカルに鋭い声を投げる。

「フェイズ3！」

『R o g e r !』

ダブルバレットへGNソード・ライフルモードを構えていたガンダムサイファーは、地面を蹴ってGNアーチャーに襲いかかる。

『機動力はこっちより上でも……動けなくなればこっちのものだ！』

対艦刀の抜き打ち。GNアーチャーが手傷を負い、傷口からアーク電流がさらにほとばしる。そこへGNソードを突き出し、貫いた。

『装甲は……やっぱり薄かつたみたいだね』

『アキタカつ……ごめん……！』

GNアーチャーのアーマーポイントが0になり、崩れ落ちるように動かなくなる。

『セイナつ！』

「フェイズ4だよつ！」

ガンダムサイファーはミサの声に応えるように、GNアーチャーの残骸を振り払つてダブルバレットに襲いかかる。

『1人になつてもオオオ！』

次の瞬間、アキタカの叫びと共にダブルバレットがドツズキヤノンを構えたかと思うと、そこから大出力のビームを照射する。

『限界駆動アクション……！』

ドツズキヤノンを構えたのを見るが早いが、ガンダムサイファーは大きく横へステップした。

真横を粒子の奔流が通り過ぎていく。

『だがつ、これでつ！』

ミサもまた回避しつつ、ジャイアント・バズの榴弾をお返しとばかりに叩き込み始めた。着弾点で大きな爆発が起り、爆風でダブルバレットは錐揉み回転しながら吹き飛ばされる。

「トドメは任せたよ！」

『了解、任せられた！』

飛んできたダブルバレットに、GNソードが閃く。太刀筋は横一直線。腰から真っ二つに両断されたダブルバレットが、そのまま地面に墜落する。アーマーポイントは0をカウントしていた。

『つ……強いっ……』

『なんて技量なの……』

戦術をほぼ封殺された状態で負けたアキタカとセイナが、声に悔しさを滲ませる。

『……でも、良いチームメイトが見つかってよかつたじやない。ミサ、頑張んなさいよ？ 絶対その相方、手放しちゃダメなんだからね』
『ああ、優勝したら次の1面ぶち抜きで特集してやるよ。だから、勝てるよ！』

通信越しに、エールを送る2人。

「……2人共、ありがとう」

クラスメイト2人の応援を受け、アザレアとガンダムサイファードは次なる戦場へと飛び去つていった。

6番ハツチに滑り込み、迷宮のような地下基地で他プレイヤーやNPCの機体を次々と倒していく中、突如ヒカルは奇妙な感覚を覚えた。

「……敵の数が少しまばらになつてきたか？」

NPCの数が、予想よりも少なかつた。普通なら気にも留めない事だったが、地下空間、中枢部に至る道であるなら、もつと激しい攻撃に晒されても良いはずだ。

その答えは、基地の向こうからやつてきた。

『——待つてたぜエ！ チトセ・ヒカルウ!!』

地下空間に建設された基地の建物が崩落し、そこから黄金色に輝くモビルスーツが姿を現した。ゴールデン・レオン・レックス、シドウ・ゴウキの新たな機体。

『ここで会つたが100年目エ!! 決着を付けてやるぜエ!!』

さらに飛び出してくるのは、黄色と黒のランダムパターンに身を包む、生まれ変わった猛虎。名はタイガーテトラ・チーフテン。初心者狩りをきつぱりと断ち、己の誇りを磨き上げることに腐心したタイガーの心意気が機体にも現れた。

だが、この場にはもうひとりいるはずだ。計算高く、抜け目のない、スピード狂の男。

「……ゼブラ、だつけか。アイツの姿が見えないな？」

『へつ、それがどうした』

彼らの余裕綽々といった様子から、どうやら落とされたわけでは無いと判断する。ヒカルは状況の整理を始めた。まばらなN P C機体、待ち構えていた2機の鎖蛮那亞仁魔流連合所属機体。今ここにいな1機の機体特性。これらを総合した時、ヒカルは背筋が凍るような戦慄を覚えた。

「……ミサ、ここを急いで突破するぞ！ 予想以上にマズい状況だ!!」

ヒカルは額に汗が滲むのを感じながら、ミサに向かって叫んだ。

『ど、どういうこと——つ、まさかっ!?』

ミサも目の前の状況から導き出される結論に辿り着いたらしい。

通信越しの声に恐慌が滲み出す。

「ああ、やつてくれたなシドウ、タイガー……そしてゼブラ！」

ギリツ、と歯を食いしばる。

「ここでタイガーとシドウが僕達を食い止め……その間にゼブラがゴールを目指すことか……！」

『へつ、気づいたところで遅いぜ、ヒカルさんよオ！ すでに俺達はここで陣地を張つて、N P C機体をかなり狩らせて貰つてる。たとえ俺達が倒されても……ゼブラがゴールすれば、そこで俺たちの勝ちだ！』

『ゼブラには、俺たちのチームの命運、その全てを託したア！ 俺たちはあいつのために、ここでテメエらをブツ倒す！ さあ来いよ彩渡商店街チーム！ 俺達の漢気……見せてやるゼエエ!!』

裂帛の気合と共に、猛り狂う獣たちが飛びかかってきた。

『ここで……ここで止まる訳にはいかないッ！ ミサ、パターンGで行く！ フエイズ1スタート！』

『G……つてことは、アレか！』

ミサは後退し、タイガーにマシンガンを撃ちかける。その一方で、ヒカルは手に持っていたターンAのシールドを、地面に突き立てる。『シールド如きがア!!』

シドウのゴールデン・レオン・レックスは、腕部のアームクローカーを

展開した。強引にシールドを引き裂き、そのままガンダムサイファー本体を仕留めるつもりのようだ。

と、その時、ヒカルの主体時間の流れが緩やかになる。

ヒカルにとつて、それは懐かしい感覚だ。

(この感覚……ッ!)

そして、その一瞬が、ヒカルに「ある事」をするための決定的な契機を生み出した。

「行けっ！」

ガンダムサイファーは、突然、突き立てたシールドの上に右手を乗せた。その手には、ライフルモードにしたGNソード。

狙いは一瞬、そのまま引き金が引かれる。だが、その粒子量は通常よりも少ない。

撃ち込まれた粒子は、寸分違わずゴールデン・レオン・レツクスの顔面……カメラアイに吸い込まれていった。

まばゆい光が、ゴールデン・レオン・レツクスのカメラを白く染め上げる。貫通効果は低い上、放出する粒子量も絞られていたために、ヘッドパートへの損傷は微々たるものだつた、が。

『ぐああっ……な、何をしゃがつ……』

次の瞬間、GNソードでクローアームを斬り飛ばすガンダムサイファーの姿があつた。

『……っ、んなろオオオ！ 猫騙しだとオ!?』

客席でこれを見ていたハムさんは、一人ほくそ笑む。

「よもやこの状況で、しかもこの機体に対して、猫騙しを見事に決めてくれるとは。それでこそだ少年」

歓喜に打ち震え、ハムさんは一人、誰にともなく、吟遊詩人の如く言葉を紡ぎ続ける。

「そう、刹那の一瞬に閃くはまばゆい光。それは百獸の王すらも一瞬、怯ませる。その隙が命取りになるとも知らずに。これぞ少年がこの場で具現化させた究極の猫騙し。人呼んで——『獅子騙し』ッ！」

そんなハムさんの命名を知つてか知らずか、ヒカルは、体勢を崩したゴールデン・レオン・レツクスを追いつめながら、昨日の事を思い

返していた。

昨日の分のバイトは、店主のユウイチから早上がりで良いと言い渡されたため、午後から時間を持て余すことになってしまった。

どうしようか、と思案しながらユウイチの店を出ようとした時、やつて来たのはハムさんである。

「少年。明日の試合について、少し話がある」

怪訝そうな顔をするヒカルを連れて、ハムさんが向かつたのは図書館であった。

受付で、メディアルームの使用を申請する。申請書類を提出すると、いくつかあるメディアルームの一つに通された。

この図書館では、過去のニュース映像やテレビ番組などのアーカイブも行つており、メディアルームで実際に視聴することができる。映像データの貸出も行つていた。

「さて、少年。君には今から一つの映像を観てもらう。大相撲の試合だ」

メディアルームでハムさんはそう前置きすると、一本の映像データを再生した。

土俵上で、2人の力士が身構えている。

拳を突いた状態から両者が立ち上がった。画面上で左側の力士が腕を突き出して攻めこもうとする。

右側の力士も腕を前に出し、受け止めるかに思えたが、突如その両手を相手の顔面の前で打ち鳴らした。すぐさま身体を翻し、相手の背後に回り込む。

不意打ちを受けた力士は振り向いて態勢を立て直そうとしたが、ここで再び顔の真ん前で両手が打ち鳴らされ、顔をそむけてしまう。そのまま、2度の不意打ちを受けた力士は押し出されてしまった。

「今のつて……」

「相撲では猫騙しと呼ばれる。立ち合いと同時に相手力士の目の前で手を打ち鳴らすことで、相手を怯ませる奇襲戦法の一つだ」

ハムさんは映像をスローで再生する。

「最初の一発、これは相手の体勢を崩し、結果的に相手に背中を向ける

格好を作り出してしまった。追い込みをかけたところ、相手は振り向いて体勢を立て直そうとする。そこでかさずもう一発の猫騙しだ。見てみる、完全に顔をそむけてしまった」

スロー・モーションで再生される立ち合いの様子を見ると、2度目の猫騙しを食らった力士は顔をそむけてしまい、そのまま勢いに押されて土俵の外へと出でてしまった。

「人間は、1点のことにつocusedすると視野が窄まる。^{すば}この視界が窄まつた状態で刺激を与えると、危険を回避しようとする本能が働いて、目を瞑つたり顔をそむけたりしてしまう。結果的に、集中が途切れ、隙が生まれるというわけだ」

そして、とハムさんは続ける。

「この取組のポイントは、その猫騙しを2回行つてある。基本的に、1度猫騙しを行つた後は、相手は警戒するため、2度同じ手は行わないものだ。そもそも、1度の猫騙しすでに優位には立つているのだから、そのまま押し出す戦法を普通は考えるはずだ。だが、彼はこれを2度行つた。振り向いて体勢を立て直そうとしたそのタイミングだ。このように、奇襲は相手が全く予想できないタイミングで放つことで意味がある」

映像の再生が止まる。ヒカルはハムさんの話に耳を傾けながら、今 の取組の映像を頭の中でモビルスームに置き換えた。何らかの方法で相手を怯ませ、動きが止まつたところでぐるつと背後に回り込みクーデグラ、というような画を思い描く。

「以前、君がガンプラバトルをした時の話を聞かせてもらつて思つたのだが、不意打ちのバリエーションを増やすべきだと私は考えている。レールガンやビームライフルの威嚇射撃、抜き打ちが君の今の戦法だが、これにアレンジを加えたり、新たな戦法を編み出したりするといいのではないか。パターンに囚われる必要がない、それもまたガンプラバトルの自由度の高さであり……奥深さだ」

ハムさんはそう言つて、メディアルームの片付けを始めた。

ヒカルは映像データの貸し出しサービスを利用し、大相撲やプロレス、柔道などの格闘技の試合データをいくつか借りる。家に持ち帰る

と、それをじつくりと見ることで映像の中で繰り広げられる全ての試合の模様を、自分なりに頭の中でもビルスースの動きに置き換えていくのだつた。

「格闘技から戦法の発想を得る……その発想自体が無かつたよな……」

昨日の記憶を思い返しながら、ヒカルは感慨深げに呟く。

ヒカルが元いた世界でも、モビルファイターに乗るようなパイロットは格闘技を参考にする者が多かつた印象があつた。だが、それはあくまで戦闘の技術。身体の動かし方、技の出し方というような直接的なものや、逆に格闘技の根底にあるスポーツマンシップなどのメンタル的なものを学ぶものが多く、それらの中間とも言える戦法そのものを取り入れる発想は、通常のモビルスーツに乗るパイロットにはあまり馴染みのない考え方だつた。戦時中ということもあり、スポーツとして格闘技を楽しむ余裕が無かつたことも一因だ。

だが、この世界では、モビルスーツの戦い——ガンプラバトルはスポーツである。スポーツとしての格闘技をじつくりと見ることで、今まで考えつかなかつたような戦法の着想ができる。例えば、この猫騙しのようだ。

もちろん、ドムなどに装備されている拡散ビーム砲や、スタングレンードのようなオプション装備でこれに似たことを行うのは可能だ。だがそれらを使わずに奇襲戦法をかける発想が、日本が誇る国技、相撲から出てくるとは。

『ぐうッ……だがまだだ、まだ俺は終わつてねえ……！』

クローアを損傷していても、マニピュレータ部分は生きており、シユベルトゲベールを構える。

『ヘッドオオ！ させるかよオ!!』

タイガーが叫び、ガトリングをガンダムサイファーに撃ちかける。「つ、ミサ！ あいつの動きは止めきれないか!?」

『向こうの弾幕が厚くて押し負けちやう、このままじゃ……！』

腕のガトリングを撃ち尽くしてもビームマシンガンがある。ビームマシンガンを撃ち尽くす頃には、ガトリングのリロードが終わつて

いる。ビームマシンガンのリチャージの隙は、背部のキャノン砲で力バーする。

(金ピカの方は今まで手数が減つた……となれば、だ)

ヒカルは瞬時に判断し、ミサに指示を出すべく通信回線を開いた。
「タクティカルパターン、Dに変更! フエイズ1からやり直しだ!」
迫りくるゴールデン・レオン・レックスに牽制を浴びせながら、地面に突き立てたシールドを構え直すと、タイガーテトラ・チーフテンの方へ機体を滑らせる。

ビームマシンガンの連射をシールドで受け切る。そのまま被弾して使い物にならなくなつたシールドを放り捨てると、キャノン砲の雨を搔い潜り接近。アザレアの方に僅かに視線を向ければ、ジャイアント・バズの弾幕でゴールデン・レオン・レックスをしつかりと引き剥がしている。

「まずは第1段階クリア……!」

『ちいつ、懐に入られたかア!』

『タイガーっ! クソッタレが、邪魔だアピンク色!』

『邪魔させてもらつてからね!』

アザレアはマシンガンの掃射にジャイアント・バズを織り交ぜ、容易には対処しにくい弾幕による陣地を作り上げていた。ゴールデン・レオン・レックスはその対処に時間をとられ、タイガーテトラ・チーフテンに近寄れない。

しかし、タイガーテトラ・チーフテンは、懐に入られても対処できるだけの近接火力があつた。その筆頭が腕部ガトリングである。

『穴空きチーズにしてやらあ!』

『やつてみろ! ただしそつちがバターになるのが先だ!』

腕部ガトリングを撃ちかけてきたところで機体の上体を反らして回避。集弾性が低いのか、何発かの流れ弾を受けてしまう。アーマーポイントが少しづつ削れるが、マイクロマシンが被弾箇所に集まり、修復作業を始めた。

多少の被弾には構わず、ガンダムサイファーは2本の対艦刀を抜くと、タイガーテトラ・チーフテンに一太刀浴びせる。腕部ガトリング

を逆に損傷させた。

「これでこつちも攻め手を一つ潰した……」

『ガトリングがつ……!』

ヒカルはそのままペダルを踏みつけ、操縦桿を引く。ガンダムサイファーは間合いを離し、ライフルモードの射程圏内を維持する。

『だがア！ まだこつちにはコイツがあんだよオ！』

彼我的の距離が離れたため、再びビームマシンガンを構えるタイガーテトラ・チーフテン。後退しながら牽制弾を浴びせるガンダムサイファーを、ビームマシンガンで追う格好になる。

（よし、撃つてきた。しばらく逃げだ）

逃げるガンダムサイファー、追うタイガーテトラ・チーフテン。

『タイガーはつ!?』

「もう少しで落とせる！ 踏ん張ってくれ！」

『お願ひね……そろそろ限界つ……!』

アザレアの弾幕を掻い潜りながら、ゴールデン・レオン・レツクスはメガガトリングガンでの応戦を始めていた。アザレアにこれ以上任せるのは危険か。後10秒。

『いい加減落ちろよオ！』

「そのマシンガン、ガーベラ・テトラのやつだよな」

唐突に、タイガーに話しかけるヒカル。口元には笑みさえ浮かべていた。

『それがどうしたア！』

「あれ、知らなかつた？ まあガトリングとキヤノンでローテーションしてたから無理もないか。実はそのビームマシンガン……」

次の瞬間、タイガーテトラ・チーフテンのビームマシンガンの、弾が途切れだ。

「……撃ちすぎるとオーバーヒートするんだよね」

『……んなアッ！ 強制冷却だとオ!?』

ビームマシンガンの冷却機構が強制作動する。銃身のあちこちから煙が立ち昇り、危険な状態であることは誰の目にも明白だつた。

ガーベラ・テトラのビームマシンガンは、まだその技術の黎明期に

開発された試作品だつた。故に技術的な問題点も多く、その一つ、発熱が致命的だつた。粒子ビームを細かくマシンガン状にして撃つ関係上、発射機構やジエネレータへの負荷も高いものだつたのだ。必然、発熱量は従来のビームライフルの比ではない。故に、冷却装置を装着してオーバーヒートを出来る限り防いだ。だが、やはり撃ちすぎると冷却が追いつかないという問題点は、ついぞ解決できないまロールアウトしてしまつたのである。

「ガトリングを失つた今、この状況に持ち込むだけでこつちが優位だ……ミサ！ フエイズ2！」

『待つてました！』

アザレアが飛び出し、マシンガンをフルオートで撃ち込んでいく。迎撃の手段はキヤノン砲だけだが、ミサはこれを全て回避。タイガーの偏差射撃すら上回る機動性で、あつという間にタイガーテトラ・チーフテンをスタンさせてしまつた。

『よし、動きは封じた！ フエイズ3！』

「もう一踏ん張りだ……！」

アザレアの射撃が止むと同時に再び懐へと飛び込むガンダムサイファー。GNソードの限界駆動アクション・クロスラッシュを発動させ、タイガーテトラ・チーフテンの分厚い装甲を切り刻む。装甲が厚いせいか、フレームを剥き出しにするに留まつたが、それでも十分だつた。

『クソッタレエエエエツ!!』

「あとはあの金ピカラインだけか……！」

フレーム構造にGNソードを突き立て、タイガーテトラ・チーフテンのアーマーポイントを全て削り切ると、その場で反転してゴールデン・レオン・レックス目掛けて突き進む。

機体のスラスターを出力限界ぎりぎりまで吹かし、時折着地してはバルバース脚部パーツの脚力で再び前に跳躍、距離を稼ぐ。

接近しながら単装砲を撃ち込む。弾はゴールデン・レオン・レックスに吸い込まれたかに見えた。

が、着弾の瞬間、金色の獅子は大剣・シユベルトゲベールを構える。

単装砲の弾は盾のように機体を守る大剣に当たり、弾かれた。

『おうおうおう、そんな豆鉄砲使つてんじやねえぞヒカルウ！　その手でのつけえ剣は飾りかア!?』

シドウが吼える。

「それを……っ、待っていたツ！」

ガンダムサイフナーは姿勢を低くすると、ゴールデン・レオン・レックスに肉迫する。

スライディングの要領で機体を懐に入れ、足を払う。いかに重厚なシルエットと言えど、大剣やメガガトリングガンなどの装備が上半身についている以上、下半身にかかる負荷は大きい。

そこに足払いをかけられれば、トップヘビーの状態にある機体が転倒するのは無理からぬ事だつた。

『ツ!』

倒れ伏すゴールデン・レオン・レックス。そこへアザレアが放ったマシンガンとジャイアント・バズの雨。飽和攻撃が始まることを察知したヒカルは、ガンダムサイフナーの機体をすぐさま後退させる。直後、ゴールデン・レオン・レックスは爆風と弾丸の嵐に呑まれ——機体は鉄くずへと変わるのだつた。

第7話 C H A S E

鎖蛮那亜仁魔流連合の2機を撃破した彩渡商店街チームは、すぐさまゴール地点、ペガサス級強襲揚陸艦5番艦・ブランリヴァルのドック目掛けて急行する。すでに最後のメンバー・ゼブラがゴールへと向かっているらしく、状況は一刻を争っていた。彼らはどうやら、N P C機体や他チームを待ち構えては撃破を重ねてかなりのポイントを稼いでいたらしく、累計ポイント次第では決勝進出の権利を握つ攫われてしまう。

ヒカルもミサも、この状況に焦りを感じていた。追い打ちをかけるように、N P C敵機からの攻勢も激しさを増していく。敵機を片つ端から倒していたシドウとタイガーが倒された今、N P C機体は勢いを取り戻し始めていた。

「ゼブラは単機で行動している。そして、この状況から考えるに、何とか足止めも食らっているはずだ。ゴールを一目散に目指しているとは言え……」

『流石に自分も落とされたら元も子もないよね』

自分たちに襲い掛かってきたG M IIIの1個小隊をそれぞれ返り討ちにしながら、ヒカルとミサはそう予測を立てた。

「あくまで希望的観測でしか無いけどね……振り切られたら終わりだ」

『どうする?』

ヒカルはペダルを踏むことでガンダムサイファーの主機を叱咤しながら、この状況における最適な戦術を考える。その間にも、並み居る敵機を屠ることを止めはしない。

「……こうしよう。僕が先行してゴールを目指す。I W S Pの機動力とバルバトスの脚力に全てを託すよ」

『……行ける?』

「行ける行けないじゃない、行くしか無い。それに……この戦術を取る上で重要なのは、アザレアの火力だ。後ろから射撃で道を作つて欲しいんだ」

アザレアの援護射撃によつて強引に道を切り開き、突破力に優れたガンダムサイファーがゼブラを追う。現時点ではヒカルが考えうる、最も効果的な策だつた。

「……僕の後ろは預けるよ」

『……わかつた』

ヒカルの言葉を受け、頷くミサの目つきが鋭くなる。迷つてゐる時間はない。

「行くぞ……ガンダムサイファー」

愛機の名を呼び、ヒカルはブーストペダルを踏み込んだ。ガンダムサイファーが地を蹴り、前に跳躍。着地前にI W S Pのスラスター全てがアフターバーナーを吐き出し、前へ前へと機体を飛翔、加速させていく。

アザレアは、飛翔していく僚機に迫る敵機にマシンガンの銃口を向けた。その引き金を弾く指に、ガンダムサイファーの命運が預けられていた。

ブランリヴァルが待つドックまで、まだ距離はある。

一方、撃破されてしまつたシドウとタイガーは、ガンプラバトルシリユレータの筐体から出て、観戦モニターに視線を向けていた。

「俺達が出来ることは全部やつた……後はゼブラに任せらしかねエ」「ヘッド……すんません、俺がもう少し冷静だつたら、あいつらも倒せたんですが」

「しゃあねエさ、むしろここまでよく踏ん張つてくれた」

タイガーを労うシドウは、ふと自分が倒される瞬間、目に入った光景を思い返した。

「そいや……ヒカルの機体、なんか一瞬妙な状態になつてたな」「妙……つて言うと?」

タイガーが訝しげに首を傾げると、「どう説明したもんかね」、とシドウは言葉を探す。

「なんか、一瞬だけ、光つたような気がしたんだよな。その瞬間だけ、やけに反応が良かつたつづーか……」

そう、シドウは確かに目撃したのだ。猫騙しを仕掛けてきた時、そ

して足払いを仕掛けようとゴールデン・レオン・レックスの懷に飛び込んだ時。そのほんの刹那の一瞬だけ、ガンダムサイファーアーは深紅の光を身に纏い、驚異的な反応を見せたのだ。

「トランザムとは違うんですかい？」

「あれはそんなんじゃねエ。トランザムでもNT-DでもEXAMシステムでもねエ。でなきや、俺が感じたあの感覚の説明がつかねえ」

タイガーアーは少し考え込むと、思いついたことを口にする。

「……ヒカル、あいつから何か気迫みたいなのが感じたんですか」「氣迫……まあ、そうだな」

シドウは内心、そんな生易しいもんじゃなかつたけどな、と付け加える。

確かにシドウはあの瞬間、ガンダムサイファーアーの光を見ると同時に、それを感じたのだ。

「チトセ・ヒカルという人間から放出される——強い殺氣を。

「よし、捉えた！」

一方、ミサの援護射撃を受けながらゴール目掛けて急行するガンダムサイファーアーのカメラアイは、先行しているゼブラの機体を発見した。機体名は「ゼブラペガサス」。新たに装備されたエールストライカーパックを翼に見立てた故のネーミングか。

ゼブラペガサスは、ちょうど自身を足止めするNPC機体を屠ったところだつた。そこへガンダムサイファーアーが追いつく。

『来やがつたか……つてことは、ヘッドもタイガーアーさんも落とされたつて事だな』

オープンチャンネルで、スキンヘッドの男・ゼブラは今の状況を口にする。

『残念だけどもうあなたのチームは1人だけだ。つまり、ここであんたを落とせば終わりだ！』

『やれるもんならやつてみやがれ！』

ゼブラペガサスとガンダムサイファーアーは、並走しながら互いの武器を構えた。GNソード・ライフルモードとショットランサー内臓のヘビーマシンガン、それぞれが火線を描いて互いを牽制する。

『一度あんたとはサシでやつてみたかつたぜ……!』

並走する2機の間を壁が遮った時、GNソードの貯蔵粒子を回復させる。相手も同じで、ヘビーマシンガンのリロードを行っているのだろう。

『タイガーさんを瞬殺した腕に、ヘッド相手にタイマン張る度胸……一体全体どんな奴か興味が出たのよ』

「そうかい……つ！」

2機を遮る壁が途切れ、再び互いの姿を視認すると同時に射撃の応酬が始まる。

『だが、今実際に戦つてみてわかつたことがある。俺に言わせりやその機体は——』

しかし、次の瞬間、状況は大きく動いた。

避けそこねたヘビイマシンガンの弾が、左腕の関節部に突き刺さったのだ。

『片手落ちよ』

バルバトスの左腕が、吹き飛んだ。

「つ!?

ガクン、と左右のバランスが崩れる。左腕を失つたことで、バランスで保つていた右腕のGNソードの分の荷重がかかり始めたのだ。とつさに操縦桿を操作し、右により過ぎた重心を戻し、I W S P のスラスター出力を調整するが、その頃にはゼブラペガサスが一步前へと先んじていた。

逃げるゼブラペガサス、追うガンダムサイファー。

『あなたのガンプラはそこまで完成度が高くねえ。操縦の方でカバーしてるから、ここまで何とかなっていた。だが、工作技術が追いついてねえんだよ』

ゼブラの言葉に、確かにその通りだ、と内心頷く。結局のところ、まだガンプラ製作は基本部分しか理解できていない。戦術と技術でカバーできるところにも限界がある。

『ガンプラバトルは工作技術もモノを言う、腕だけでカバーできると思つたら……大間違いだ』

ゼブラは静かに告げると、エールストライカーパックのアフター
バーナーを全開にした。

『あばよ、エースパイロット。俺は先に行くぜ』
「だが、他にもカバーできる部分はある」

『……あん?』

遠ざかるゼブラペガサスの背中を見つめながら、それでも追いすが
ろうとするガンダムサイファー。それを駆るヒカルは、ペダルを踏み
つけながら、余裕の笑みすら浮かべていた。

「ミサ、頼んだ」

『了解っ!』

次の瞬間、ゼブラペガサスは爆風と弾丸の奔流に呑み込まれた。

『んなつ、なあつ!?』

『私のこと忘れてたでしょ』

ミサが得意気に告げる。スラスター出力を限界まで上げて疾駆す
るアザレアのマシンガンとジャイアント・バズの硝煙が、後ろに流れ
ていく。

『アザレア……ちつ、完全に眼中に無かつたぜ……!』

ゼブラペガサスもまた、大幅な損傷を受けていた。よろよろと立ち
上がるその姿からは、右腕が消えている。アザレアの飽和攻撃に耐え
切れず、ついに吹き飛んでしまったのだ。

「足りない部分、どうしようもない部分は確かにある。それをカバー
してくれるのが仲間だ。仲間がいるからこそ……」

『私たちは、戦えるっ!』

ちつ、とゼブラは舌打ちする。

『機体の完成度で足りない部分を他のあらゆる要素で帳消しにかかっ
てる、つて訳か』

『無茶苦茶じやねえか、と呟く。』

『だがア! それでいつまでも誤魔化せるとと思うなよオ!』

再び並走する格好になるガンダムサイファーとゼブラペガサス。
ゼブラペガサスが速度面では優位なことに変わりはないが、ミサが後
ろからマシンガンやジャイアント・バズを撃ちかけることで、ゼブラ

ペガサスに最高速度を出させることを許さない。

爆音と射撃音をジャブローの地下基地に響き渡らせ、強襲揚陸艦ブランリヴァルのドックが目前に迫る。

「届け……届いてくれ、ガンダムサイファーツ！」

『まだだアアアアアア！』

横一線に並ぶ。もはや牽制弾を互いに撃つこともない。ただ、前へ前へと自分の愛機を押し出すことに全力を尽くす。

バーニアから吐き出されるアフターバーナーの火が2機の光跡を照らす。

満身創痍の剣ガンダムサイファー士ゼブラペガサスと半人半馬が、ジャブローの地下基地を駆け抜けしていく。

やがて、2機はブランリヴァルのゲートを、同時に潜り抜けた。

『Battle Ended!』

ゴール地点にたどり着いたことで、合成音声がバトル終了を告げる。

肩で息をしながら、ヒカルは「対戦結果を集計しております。結果発表まで筐体の外でお待ち下さい」と表示された画面を一瞥いちべつする。

後はポイントの集計と、ゴール地点にたどり着いた結果判定に全てを委ねるしか無い。やれることは全てやつたし、完走も出来た。鎖蛮那亜仁魔流連合以外のチームは全機撃破できたので、ポイントもかなり高いはずだ。

「僕のガンプラは完成度が高くない、ね……」

ゼブラの言葉を口にしてみる。言われてみれば、ここまでガンプラを作つてこれたのはハムさんの手ほどきと、ミサやユウイチの手伝いがあつたからだ。

これからこのチームでガンプラバトルを続けていく上で、この問題はかなり致命的だ。このガンプラの完成度が高ければ、ゼブラに遅れを取ることもなかつたかもしれない。それが悔やまれる。

筐体の外に出ると、ゼブラが立つていた。

「良い勝負だつた。お互腕を磨いてまたやりてえもんだ」

互いに手を握り、握手で健闘を称える。

「正直、まだガンプラを作る方は素人でね……戦う方はまだ何とかなるにしても、これから先、ガンプラの製作技術を地道に磨くしか無いかな」

「まあ……あの時は厳しいこと言つたけど、本当にガンプラ制作つてのはバトルにも響いてくるからな。腕だけじゃどうにもならない限界もあんのよ」

ゼブラは肩をすくめる。

「ただ、あんたほどのガンプラバトラーに工作技術がまだ追いついてねえのは本当に勿体ねえと思う訳よ。工作技術が追いつけば、確実にあんたは化けるぜ。俺が保証する」

その言葉に、ヒカルは頷く。

「逆に言えば、工作技術を磨かない限り、いつか必ず壁にぶち当たるつてことだね」

「そういうことだな……俺で良ければいつでも力になつてやる。大したこと教えるかわからんねえけどな」

ゼブラとヒカルは笑い合う。

そこへ、ミサやシドウ、タイガーがやつてくる。

「良くやつたゼゼブラ！ 最終的に並走して、ゴールつてのはちょっと締まらなかつたが、ゴールへの到達速度は俺たちと彩都商店街チームが文句なしの1位だ！」

「どんでもねえ作戦考えるもんだなお前……。1人で突つ走るつて言い出した時はどうなることかと思つたぜ」

シドウとタイガーがゼブラの背を叩きながら、彼の奮闘ぶりを賞賛する。

一方のミサは、脱力したように肩で息をしていた。しかし、その顔には満足げな笑みが浮かんでいる。

「お疲れ、ミサ……やれることは全部やつたな」

「そうだね……でも、どんな結果でも悔いはないよ」

ミサはそう言うと、持ってきていたペットボトル飲料に口をつけた。

やがて、アナウンスと共に決勝進出チームが公開される。

『おまたせ致しました。決勝進出チームは……彩渡商店街チームとハイムロボティクスチームです！』

会場のスクリーンに映し出された結果を見て、シドウたちが声を上げて悔しがる。

「くつそおおおダメだつたかあああ！」

「やつぱ2人がやられたのがマイナスだつたんすかねえ……」

タイガーがいつまでも地団駄を踏む一方、ゼブラはすぐに冷静さを取り戻し、敗因を分析していた。

「まあ……ベストを尽くしてこの結果だつたんだ、悔いはねえ」

シドウは目を細めて結果を一瞥する。

一方の彩渡商店街チームでは、ミサが飛び跳ねて喜びを表現していた。

「決勝通つた！ やつたよヒカルくん！」

「多分ものすごい僅差だつたんだろうなあ……よく通つたよねこれ」

一方のヒカルは、口では結果に対する感想を述べつつも、顔には笑みが浮かんでいる。

しかし、すぐに真剣な表情になると、ミサに向き直る。

「確かに決勝まではインターバルがあつたはずだ。昼食をとつたらガンプラのチェックをしたい……手伝つてもらえるかな」

「……えつ？ それはいいけど、時間があんまりないよ？」

「構わない。出来ることは全部やろう」

そう言うヒカルの頭には、ゼブラからの言葉がまだ残っていた。

「……工作技術の穴、埋めてみせれば良いんだろ」

ヒカルの視線は、ガンダムサイファードに注がれていた。

一方その頃、ハイムロボティクスチーム。

「驚いたな、マジで予選突破するなんて」

所属ファイター、カマセ・ケンタは息を呑んでいた。決勝で戦う相手が、まさか自分の古巣だつたとは。

「カドマツさん、この決勝、アレ使いたい」

「やだよ」

メカニックのカドマツに提案するが、カドマツは即座に却下した。

「趣味じやないんだよああいうの……それに、今から調整して間に合
うかわからんねえぞ」

「でも、このままじゃマズいんだ。相手は2対1の連携が得意なんだ
……同じ土俵に立つと確実に潰される」

カマセは内心、恐れていた。過去の自分を否定されたようで、心穏
やかではいられなかつた。

これでは、自分があのチームを抜けたことが悪のようではないか。
よりよい環境を求めてチームを移ることの何が悪いのだろう。

「頼むよ……ここで勝ちに行きたいんだ」

「……わかつたわかつた。ちょっと急ピッチで調整するからな、お前

も手伝えよ」

「もちろんだ」

カドマツはため息をつくと、アセンブルシステムを起動する。
その準備を手伝いながら、カマセは一人、暗い表情で呟いた。
「……金と技術が可能にするものを、見せてやるよ」

第8話 A W A K E

決勝戦は昼休憩が終わった後、準備時間として30分が与えられている。

この間に機体のメンテナンスや、アセンブルの見直しを行うというものだ。

彩渡商店街チームとハムさんは、急ピッチでガンプラの整備を行つていた。

「GNソードと対艦刀は私が引き受けよう

「お願いします」

ハムさんはガンダムサイファードの武装を取り外すと、刃物を研ぐようになにヤスリがけを始める。

一方のヒカルは、ガンダムサイファードの四肢と頭部を分解し、関節部分のパーツを外す。

「ミサ、アザレアの予備パーツを貸して欲しい。具体的には関節部分」「ガンダムサイファードに使うの？」

ヒカルは頷く。

「ガンプラの完成度を高める。短時間で出来ることを考えたら、今はこれがベストだ」

即ち、優れたビルダーの手がけたパーツを、自分のガンプラに組み込む。

「正直、今僕がやつてていることはビルダーとして邪道だと思う」

ヒカルはどこか苦々しい表情を浮かべながら、取り外したバルバトスの左腕を見る。ゼブラとの戦いで、ガトリングの前に吹き飛ばされた左腕だ。

「でも、今の僕に出来ることはこれぐらいしかない。ミサのガンプラビルダーとしての腕に、今は賭けるしか無いんだ」

その様子に、ミサは静かに頷き、微笑む。

「ヒカルくん、大丈夫。私、ここまで信頼してもらえるだけでも嬉しいんだ。バトルの時も、ガンプラ作りでも。だから、いくらでもヒカルくんの力になる」

「……ありがとう」

ミサが差し出した関節パーツを受け取ると、バルバトスの腕に取り付ける。ヒカルの目には、たつたそれだけの工程で、ガンダムサイマーが生まれ変わったような、そんな感覚を覚えた。

「……この決勝戦、絶対に勝つよ」

「うん」

その言葉を最後に、2人は無言で、時間いっぱいまでガンプラの整備を続けるのだつた。

その一方で、ハムさんもまた、無言でガンダムサイファーの近接武器にヤスリを掛け続けていた。

彼の脳裏に浮かぶのは、予選の最中に一瞬だけ見せた、ガンダムサイファーの姿だ。

赤い光をその身に纏い、驚異的な反応速度を示したその一瞬。ハムさんの眼は、しつかりとその姿を捉えていた。

（私の心眼が狂つていなければ……この少年、途轍もない逸材だ）

知らず、その顔には笑みが浮かぶ。

（そうだ……あの姿が見間違いで無いのならば、この少年は……）

ハムさんは、より鋭く仕上がったGNソードを見つめ、その笑みを深くする。

（「極み」に達している……！）

決勝戦の開始時刻となつた。

自分たちの使用機体の整備を終えた彩渡商店街チームは、観客が見守る中、筐体へと向かう。

対するは元彩渡商店街チームのファイター擁するハイムロボティクスチーム。

「カマセつていう相手のファイター、少なくともミサの戦い方は熟知しているはず。それに向こうのチームはスタッフも優秀、企業スポンサーだから地力もある。おまけに去年までのディフェンディング・チャンピオンか」

「そうだね……ホント言われて改めて実感できるよ。こつちが圧倒的に不利だね」

それまでややうつむき加減に歩いていたミサは、顔を上げてヒカルの顔を見つめる。

「でも、今の彩渡商店街チームの情報は集めきれていないはず。君の存在が……まさしくジョーカーなんだよ」

「ジョーカーね……」

ヒカルはかつて、自分にかけられた言葉を思い出す。

——あなたは、僕達の英雄だから……。

——迎えに来たぜ、ヒーロー！

記憶に刻み込まれた、かつての世界で自分にかかる期待の数々。それは重荷となつてヒカルにのしかかってくる。

「……まあ、でも、いつか」

だが、そんな自分にかかる重圧に抗うでもなく、かと言つて重圧から逃げるでもなく。ただ真っ向からそのまま受け止める。それがチトセ・ヒカルの在り方だった。

「それなら、ジョーカーの役割、しつかり果たさないとな。ババ抜きじや嫌われる札だけど

「ゲームの勝ち負け決めるための大変な札だから、ババ抜きでも無いと困るんだよ」

ヒカルが飛ばす軽口に、ミサが笑つて返す。

「……行くか」

「そうだね、行こう」

商店街の名を背負い、2人の若きファイターは筐体の扉を開けた。エンデュミオン・クレーター。

「機動戦士ガンダムSEED」で、過去に地球連合軍とザフト軍の戦闘が行われたと語られる古戦場。「不可能を可能にする男」ムウ・ラ・フラガが「エンデュミオンの鷹」という二つ名を得た地。

それが、決勝戦の舞台として設定されている。

この地に、ガンダムサイファードとアザレアは降り立ち、対戦相手の到来を待ち構える。

《決勝戦のルールは単純明快。相手チームを全部撃墜したほうが勝ちだよ》

「今のところ、ハイムロボティクスチームにはあのカマセつてファイターしかいないように思うけど」

ミサのルール説明に、ヒカルは疑問点を呈する。数の上ではこちらが有利。オープンな状況の戦闘では数で勝る勢力が優位に立つのがセオリーだ。この原則は性能と技量に余程の差がない限り、覆ることはない。ということは。

「……これで決勝上がつてるわけだから、やっぱりカマセつて男、相當に強いってことになるのか」

『ハイムロボティクスで機体を仕上げてるから、機体性能も段違いだろうねえ……』

ヒカルが何気なく呟いた言葉を受けて、ミサはげんなりとした様子でため息をつく。

「でも、やることは変わらない。相手の機体構成に合わせて、常に2対1の状況で……」

ヒカルが作戦を口にしたその時だ。

彩渡商店街チームの眼前に、巨大な影が舞い降りた。
塗装は赤と白。

ストライクフリーダムやアカツキをベースとしており、バツクパックのオーライザーやバンシィのボディが目を引く。

しかし、それらの個性付けに加え、その機体には大きな、文字通り大きな特徴があつた。

サイズである。

ガンプラバトルでは1／144スケールの、いわゆるH_{ハイグレード}Gと呼ばれるモデルをベースに機体が構成されるのが主流だ。一部のビルダーは1／100スケールのM_{マスター}G_{グレード}モデルを使用することもあるが、制作難易度の高さや取り回しの悪さなどから、敬遠されがちである。

だが、眼の前に現れた機体——登録名・「スタリオンライザー」——は、MGサイズよりもさらに大型。1／60スケールの、P_{ペーフェクト}G_{グレード}モデルによつて機体を構成していた。HGモデルと比較すれば、そのサイズは2倍以上。さらに、ディテイールや可動域もHG以上。ガン

プラバトルにおいて、HGモデルとの性能差は歴然としていた。

『見ろよ！ この圧倒的なガンプラをオ！』

その機体を駆るはカマセ・ケンタ。彼は、腕部のGNソードⅢを構え、大地を蹴つて突進する。

『PG機体っ!? タウンカップでそんなの使うチーム見たことないよつ!?』

ミサは目を丸くして叫んでいる。

ヒカルは声にこそ出さないものの、内心ではパニックに陥つていた。状況を甘く見積もりすぎていたのだ。

2対1、圧倒的不利な状況を覆すために、機体ガンプラそのものに性能差をかける。

それをやすやすと実行できるのがガンプラバトルだ。ヒカルはこの現実を、ここに来て突きつけられる格好になつた。

「さつ……散開つ！」

『これ……これらのパターンっ!?』

「アドリブだよこんなの！ 想定の斜め上だ！」

落ち着かなければ、という思考が脳内にあふれかえる。だが、それは逆効果。ヒカルの思考はより恐慌に駆られてしまう。

何故ヒカルはここまで恐慌しているのか。それは、彼の持つ「常識」にこそあつた。

これだけの大型兵器がヒカルの世界に無いわけではない。大型のモビルスースやモビルアーマーは確かに存在する。だが、それはあくまでも拠点の防衛や攻略、あるいは大隊・旅団クラスの、数で攻める敵を個の力で制圧するといった運用だ。小隊・分隊クラスの敵軍にぶつけるには、あまりにも非効率。それが彼の常識だ。

実際、彼は何度か大型兵器と銃を交えている。だが、その時はモビルスース搭載母艦のサポートがあつた。また、大型兵器そのものに何らかの欠陥が存在するなど、状況が味方していた部分も多く存在した。

だが、これは戦争ではない。ガンプラバトルなのだ。常識など、この場ではただの枷にすぎない。

そして、ヒカルは理解している。小隊・分隊クラスで大型機体に勝つことは不可能に近い。兵器としての地のスペックが違すぎるからだ。乗り手の技量すら、この圧倒的性能差の前では誤差に等しい。

ヒカルは戦場に長く居すぎたのだ。戦場のセオリーに囚われ、その結果がこの恐慌状態だった。

『うちもこの機体を持ち出すのは予定外だつた……』

通信用スピーカーから聞こえてくるカマセの声に耳を傾ける余裕もない。ペダルを無我夢中で蹴つ飛ばし、紙一重で最初の突進を回避する。

『でもなあ……お前らに現実、見せてやりたくてなつ！』

突進そのものを回避するものの、その余波でガンダムサイファードは姿勢を崩しかける。どうにか機体の制御を保つので精一杯だ。

カマセが言葉を放つた意図は違うのかもしれない。だが、ヒカルはその言葉を受け止めるしか無い。

戦術や技量、それら全てを無意味にする彼我の戦力差。そしてガンダムバトルという世界において、価値をなくしたヒカルの常識。

それら全ての現実が、ヒカルに牙をむいていた。

スタリオンライザーの懷に入り、一太刀浴びせようと試みるが、素体が機動力の高い機体で構成されているためか、動きは俊敏で捉えきれない。

振り抜いたGNソードは空を切る。

そこへ、スタリオンライザーのビームライフルから一筋の光条が放たれる。

ガンダムサイファードの真横を、荒れ狂う光の奔流が通り過ぎた。

ヒカルは恐慌の余り目を見開き、ガンダムサイファードを掠めていつた高出力のビームを凝視する。

結局、遠距離での撃ち合いになる。射撃を続けるミサの回を務めるしか、この場での勝機はない。だが、もしミサが落とされたらどうなるだろう。決定打に欠ける状況で、虎の子のアザレアを失えば、いよいよ自分たちに打つ手はなくなってしまうのだ。

（ミサへの負担が大きすぎる……くそつ、何か、何か手を……！）

せめて刺し違えてでも、手傷さえ負わせることができれば。そんな捨て鉢な考え方まで浮かんでくる。

しかし、僅かに残された冷静さが、その行動を引き止めていた。ヒカルの精神状態はすでに、理性と自棄による極限の綱引き状態に差し掛かっていたのだ。

『ちよこまかとオ！ 鬱陶しいんだよルーキー！』

しかし、カマセが苛立つたように叫ぶ。

周囲を飛び回りながら隙を探すというガンダムサイファードの行動は、スタリオンライザーの妨害という一点において、確実に効果を上げていた。

『だつたら……こいつでも喰らいやがれツ！』

鬱陶しさが募ったのか、ついにカマセは奥の手を出してきた。オーライザーに接続されている2基の太陽炉の出力が上昇し、大量のGN粒子を放出する。吐き出されたGN粒子は指向性を持たないものの、スタリオンライザー周辺一帯の空間が高濃度のGN粒子で満たされた空間を作り出した。

GN粒子は、それ自体が物理的な力場を持つ。大量のGN粒子が運動しながら滞留する空間は、傍から見ればさながら吹雪のような光景だが、実際に雹や霰が大量に吹き荒れるような状態である。その真つ只中に巻き込まれたガンダムサイファーは、ひとたまりもなかつた。「ぐああああつ……！」

堪えきれず、木の葉のように舞い上がり、吹き飛ばされるガンダムサイファー。

四肢がもがれるほどでは無いものの、アーマーポイントは危険域に差し掛かる。この状態でまともに攻撃を受けてしまえば、大破は必至だ。

不幸中の幸いか、フレーム構造へのダメージこそ少ないものの、もはやガンダムサイファーは一発の攻撃も受けることが出来ない状況に陥る。

『ヒカルくんつ……うわつ!?』

『金と！ 技術無しで！ 勝てるのかよオツ！』

ミサが悲鳴混じりの声を上げる中、スタリオンライザーは猛然とアザレア目掛けて突進した。

誰の目から見ても明らかな、絶望的な状況。

だが、スタリオンライザーが回避の間に合わないアザレアへ迫つていく光景が、ヒカルの中に眠る記憶を呼び覚ます。

(同じだ、あの時と)

ヒカルの脳裏に蘇るのは、たじろぐガンダムエクシア目掛けてトルギスが斬りかかる光景。

——馬鹿つ、手え出すな！

——速いつ……！

(その時、僕は)

ヒカルは反射的にブーストペダルを踏みつけた。転倒したガンダムサイファーの身を起こすと、アザレアの元へと向かわせる。

(どうしていた？　そして……)

身体が勝手に動いていた。

アフターバーナーに火が入る。

ガンダムサイファーが、アザレアの元へと向かう。

それが自分の身を危機に晒すことは明白だった。

(……どうなつたんだつけ？)

スタリオンライザーが拳を固め、アザレア目掛けて突き出す。

『潰れろよオ！』

振り下ろされる一撃。

間一髪、ヒカルは、スタリオンライザーとアザレアの間に飛び込んだ。

その瞬間。

——最後まで、諦めるなよ！

脳裏に、かつて戦場で仲間を護るために散った1人の男の声が聞こ

えたような気がした。

「……う？」

ミサは薄目を開く。鉄の塊が擦れあい、軋むような音が聞こえていた。

アザレアに撃墜判定は出たのだろうか。そう思い、視線をやや上げると、0を刻んでいるはずのアーマー・ポイントは、最後に見たときと同じ数値だった。

「一体、どうなつ……て……」

ミサはさらに視線を上げる。

モニターに大きく映し出された影。それが、ガンダムサイファードの機体であることに気づくのに、少し時間がかかった。

「えつ……!?」

ミサは、目の前で何が起きているのかを把握した。が、理解ができなかつた。

ガンダムサイファードが、二振りの対艦刀を目の前で交差させ、スタリオンライザーの拳を受け止めていたのだ。

（ミサが貸してくれたパーツと……ハムさんがくれたガンダムバルバトスのパーツ……全く、我ながら世話の焼けるルーキーだよ）

ジョーカーが聞いて呆れる、ヒカルは自嘲的に笑う。

ガンダムバルバトスのフレーム構造は頑丈だつた。メイスや滑腔砲などの大振りで重い装備を扱うことが出来るのも、このフレーム構造あってこそ。だからこそ、PGの機体の一撃にも張り合うことは出来る。

さらに、ミサのジョイントパーツだ。元々重武装を扱うアザレアの予備パーツだからこそ、丁寧に、頑丈に作つてあつた。

この2つの相乗効果が、スタリオンライザーの拳を受け止めるだけの力を生んだ。

だが、このままではやがて、ガンダムサイファードが押し負けてしま

う。

ヒカルの耳にも、ガンダムサイファーアーの腕部が、脚部が軋む音が聞こえた。

だが、ヒカルは逃げない。操縦桿を握り続ける。

(ガンダムサイファーアー……うまく作つてやれなくて、ごめんな。だけど……)

拮抗する状況の中、信じがたい現象が起きた。

ガンダムサイファーアーが、一歩だけ前へと進む。

スタリオンライザーの拳が少しだけ押し返される。

(足りない分は僕自身の力で埋め合わせる。だから……)

操縦桿を前へ倒す。目の前の巨大な拳を押し返すために。

「まだまだやれるよな……ガンダムサイファーアー!!」

筐体内で、ヒカルは顔を上げる。

その動きにシンクロするように、ガンダムサイファーアーも顔を上げる。

ガンダムサイファーアーのカメラアイは、
赤々と輝いていた。

突如、深紅の光がガンダムサイファーアーから放たれる。

その光は衝撃波となつて、スタリオンライザーの拳どころか、巨大な機体そのものを弾き飛ばす。

『嘘だろっ……!?』

スタリオンライザーを操るカマセは、突然吹き飛ばされた機体を立て直しながら、驚愕で目を見開く。

目の前には、アザレアを護るようにして前に立つ、深紅の光に身を包んだガンダムサイファーの姿が在った。

「えつ……あんなこと出来るの!?」

「おいおいあんなの見たことねえぞ……!?」

観客席のセイナとアキタカの2人は、その光景に絶句する。

「あれだ、あの光だ……！俺が見たのはあの光だ！」

同様に、観客席で観戦していたシドウは、興奮氣味に声を上げる。

「なんつう奥の手隠し持つてやがる……！」

シドウの隣では、ゼブラが啞然として呟く。

「あの光……そうだ、これが見たかったッ!!」

ハムさんは歓喜に満ちた表情を浮かべる。

「ああ、こういうノリの方が、俺の好みだね……」

カドマツは、満ち足りた面持ちでモニターを見上げる。

今や、会場中がガンダムサイファーに起きた現象に、その身に纏う光に、魅入られていた。

ガンダムサイファーは、自分より遥かに大きいスタリオンライザーの前で、改めて二振りの対艦刀を構える。

歴戦の剣豪と見紛うばかりの堂々たる立ち姿を前に、カマセは思わずたじろいだ。

『そんな……PGのパワーと張れるなんて……!?』

ここまでで受けていたガンダムサイファーの損傷は、すさまじい速さで修復されていく。マイクロマシンが活性化し、修復作業のスピードが格段に上昇しているのだ。

ヒカルは自分の頭の中がすつきりと、クリアになつたのを感じる。
(ああ、思い出した)

身体の奥底から、闘争本能が溢れ出る。次にどうすればよいか、どう戦えばいいか、手に取るようにわかる。

ガンダムサイファーと自分が一体化したのを感じる。

今やヒカルはガンダムサイファーそのものであり、ガンダムサイファーはヒカル自身だった。

この感覚には覚えがある。

かつてヒカルがいた世界で、自分を、仲間を幾度も救ってきた力。人機一体の境地。

常識を破壊し、非常識に戦う者の象徴。

ヒカルの世界では、こう呼称されていた。

覚醒、と。

ガンダムサイファーは月面を蹴り、飛び立つ。

上空に上がると、少しだけスタリオンライザーが小さく見えた。あんなものに今まで怯えていたのか。

こうして見ればただのモビルスーツに変わりはない。

いつもどおり戦おう。

少しだけ、手間がかかるけれども。

スタリオンライザーは慌ててGNソードⅢを構え、追いすがろうとする。

その動きに合わせるように、ヒカルはライフルモードとしたGNソードを構え、撃つ。

それまで以上の威力と貫通力を持つたライフルの粒子弾が、狙い違わずスタリオンライザーの脳天に突き刺さり、爆ぜた。

『な……何かしたんだろ!? アセンブルシステムに、何か細工したんだろ!?』

混乱のあまり喚き散らすカマセの声。

だが、今のヒカルの耳にはノイズでしかない。

GNソードが展開され、その刃にはGN粒子が集まっていく。

定着させたGN粒子が過剰に励起し、ビームサーベルのように粒子の刀身を形成する。

接近してひと難ぎすると、スタリオンライザーの左手が、装備していたビームライフルごと溶断された。

『認められるかよ、こんなの……!』

スタリオンライザーは残った手でガンダムサイファードを驚撃みにしようとする。

その手は虚しく空を搔いた。

一瞬前までそこにいたガンダムサイファードは、目にも留まらぬ速さでスタリオンライザーの背後に回っていたのだ。

『ちゃんと……ちゃんと調整したのに……！』

バツクパツクのオーライザーにガンダムサイファードが手をかける。力を込めるごとに、オーライザーは金属が砕ける音と共に引き剥がされた。

常識を超えた性能を発揮するガンダムサイファードに、スタリオンライザーはただただ翻弄されている。

ヒカルはGNソードを振りかぶり、スタリオンライザーのコックピットブロツクに突き立てた。

『こんな…………んなの…………つ！』

スタリオンライザーの太陽炉が損傷し、行き場をなくした粒子が機体から溢れ出る。

『嘘だアアアアアアアアッ!!』

カマセの叫びと共に、スタリオンライザーの巨躯はエンデイミオン・クレーターの藻屑と散つた。

GN粒子の奔流が、ガンダムサイファードを覆い尽くす。

「ヒカルくんっ！」

呆然としてその一部始終を眺めていたミサが、我に返ったように叫ぶ。

やがて、GN粒子の霧が晴れる。

そこには、赤い輝きを失つたガンダムサイファードが、直立不動の姿勢で月面にそびえ立つていた。

第9話 STAND BY

粒子の奔流が止み、目の前でスタリオンライザーが倒れ伏すのを見て、ヒカルは大きく息を吐いた。

「……まさか、本当に覚醒が使えるなんて」

パイロットと機体の境界線を取り払い、あたかも自分自身がモビルスーツとなつたかのように機体を自在に操る人機一体の境地、覚醒。だが、本物のモビルスーツを操るならばともかく、ゲームであるガンプラバトルシミュレータ上で覚醒が発現していることに、ヒカルは今更ながら違和感を覚え始めた。

（あくまで覚醒はモビルスーツそのものと一体化する力、のはずだけど。仮想空間上にゲームとして再現しているに過ぎないはずのガンプラバトルシミュレータでも使えるつて、よくよく考えれば妙な話だな……）

目の前のスクリーンから月面空間は消え去り、自分のチームが勝利したことを告げるリザルト画面が表示されている。その画面は、たつた今まで自分がゲームをしていたことの証左だつた。

ヒカルは搭載されている3Dスキャナから、ガンダムサイファーのガンプラを取り出す。ガンプラという実体は確かにあるが、このガンプラそのものが戦っていたのではない。3Dスキャナによつて仮想空間上に投影されたデータを操つていただけにすぎないので。

（思い込みによる自己暗示の可能性も否定出来ないけど……）

だが、実際にガンダムサイファーの性能が格段に向上了いていたことは事実だつた。マイクロマシンやGN粒子が活性化していた現象、しかもゲーム中の演出だけではなく、機体の性能向上などといった効果の発現が、実際にガンプラバトルシミュレータで起きていたのだ。まるで、「覚醒」というシステムがこのガンプラバトルシミュレータというゲーム内でサポートされているかのようだ。

一度抱いた違和感を拭うことが出来ずに、首を傾げながら、ヒカルは筐体から外に出た。

途端に、大歎声がヒカルを迎えた。

『今回の彩渡町タウンカップ、優勝者は彩渡商店街チームです！　勝者に大きな拍手を！』

アナウンスが彩渡商店街チームの優勝を告げるのを聴いて、初めてヒカルは勝利の実感を得た。

「信じらんない……勝つっちゃった……！」

いつの間にか外に出ていたのか、ミサも同様に感極まつた様子で咳く。

「……それにしても、凄かつたよヒカルくん。あんなの初めてみた」「あんなのって？」

ミサが指し示しているのが覚醒現象そのものなのか、あるいは覚醒中に発揮した技のどれかなのかわからず、ヒカルは聞き返す。

「アレだよアレ、突然真っ赤にバーンて光つて、GNソードがでつかくなつて、こう、『^ス_カここからいなくなれーっ！』^バ_ぶて叫びだしそうだつたアレ」

「……は？」

ヒカルにはミサの言つている意味が今ひとつ掴みきれなかつたが、なんとなく覚醒現象そのものだな、と把握する。

「俺も聞かせてもらいたいね」

と、声をかけてくる者がいる。決勝戦の対戦相手、カマセ・ケンタだ。

「一体何なんだよアレは。俺も見たことがない……まさかチートじやないよな」

「やめてよ人聞きの悪い！　私だつてあんなの見たこと無いし、そもそもうちのアセンブルシステムがそんなこと出来るほど高性能じやないつて、カマセ君ならよーくご存知のはずだけど」

難癖をつけるカマセに対して、ミサは自虐も込めながら即座に言い返す。

「……じゃあなんなんだよ。アレはどういうシステムなんだ？」

その様子を見かねたのか、ハイムロボティクスチームのエンジニア、カドマツがやつてくる。

「落ち着けよ見苦しい。……アレは覚醒っていうシステムだな」

カドマツの言葉に、ヒカルは驚きの余り大きく目を見開く。その反応を知つてか知らずか、カドマツは言葉を続ける。

「ただ実のところ、俺もどういう原理であれが発動するのか、詳しくはわからないんだ。一応、ガンプラバトルシミュレータのシステムでは標準仕様って事になつてるんだが……」

どこか歯切れの悪いカドマツの言葉に、ミサが首を傾げる。

「標準のシステムの範囲内で発動してゐるのに、条件がわからないの？」
「そななんだよな……覚醒したから使える、そういうもんらしい。ただ、一部のプレイヤーが覚醒システムを使っているのは事実だ。俺も久々に発動するところを見たよ。いやー……良いもん見れたわ」
どこか満足そうなカドマツと対照的に、カマセは頭を抱えている。
「そなんありかよ……インチキじみてんだろ……」

「お前は阿呆か。PG使つて圧倒的に有利な試合にしようとして、それで負けたらインチキつてのは阿呆の言うことだ。そなんだから負けるんだよ阿呆」

「3回も阿呆つて言われてやんの」

カドマツはカマセに辛辣な言葉をかけた。ミサもこことぞとばかりにカマセを茶化す。

「あのさ……カマセ。一つだけ弁解させてくれないか」

「なんだよ」

不貞腐れたカマセに對して、ヒカルは声をかける。

「少なくとも、最初にあんたの拳を受け止めた時は、まだ覚醒が発動していなかつたはずだ。この機体でどうにか耐えていた。覚醒はたまたまその時のタイミングで発動したんだ」

「何が言いたいんだよ」

顔を上げるカマセに目を合わせ、ヒカルは答える。

「……僕の機体はそもそも、ハムさんに勧められた機体のパートを使つてゐる。それに、決勝前の30分間のインターバル中に、パートを交換した。ミサのパートにね」

その言葉に、カマセははつとミサを見た。

「……そうか。確かに、ミサの機体つて基本的に重武装だから、関節部

分にかなり手が入つてた……あの時はそんなところに力入れてどうすんだ、つて思つてたけど

そういうことかよ、とカマセは舌打ちをする。

「僕が覚醒できたから勝つた……確かに、そうかもしれない。でも、これは僕一人の勝利じやない。あの時、僕があの攻撃を受け止められたのは、ミサやハムさんのお陰だつたんだ。だから……もつと仲間を信じてあげても良かつたんじやないかな、つて」

カマセはその言葉に、肩を震わせる。

「仲間を信じる……ね。そうしたかつたさ。俺もそろすべきじやないかつてずっと心のどつかでは思つてたさ……」

ぽつり、ぽつりと絞り出すように言葉を紡ぐカマセ。そして、ふいに顔を上げる。その顔には必死さがありありと浮かんでいた。

「でも……俺はダメだつたんだ！ もつと、もつといい環境で自分の腕を磨きたかつた！ 今の環境に身を置き続けて、自分が腐っていくのが怖かつたんだ……！」

心情を吐露するカマセに、ミサは優しげな笑みを浮かべる。

「カマセ君の気持ちはよくわかるよ」

「あ……？」

「私だつて、もつといい環境で、もつといい設備で、ガンプラを作りたい。ファイターなら当然、誰だつてそう思う。でもね、私たちは商店街の名前を背負つてる。だから、むしろ自分で環境を良くしていくしかないんだ」

「……どうやつて」

カマセが漏らした疑問に、ミサは胸を張つて答えた。

「足りないものは他で補えば良いんだよ。腕とか、スピリツツ的なものでさ」

その言葉に、カマセは呆気にとられた後、毒氣を抜かれたようにふつと笑う。

「……なんだよそれ。ドヤ顔してる割にはずいぶんと漠然としてんじゃねーか」

「う、うるさいうるさいっ！ そーゆーもんなのっ！」

カマセの指摘に、駄々をこねるよう手脚をジタバタさせるミサ。ヒカルがその様子を苦笑して見守っていると、カマセが手を差し出す。

「今日は俺の完敗だ、もうこればっかりは潔く認めるしかないさ。でも、俺はこんなところで終わる男じゃない……それを、あんたに誓わせてくれ」

どこか憑き物が落ちたかのように、笑みを浮かべるカマセ。

「……ああ、その誓い、確かに聞き届けた。また勝負しよう！」

ヒカルは差し出された手を握る。

戦いが終わればノーサイド。敵も味方も関係なく、そこには激闘を繰り広げた戦士が健闘を称え合う姿だけ。

(これが……ガンプラバトル、か)

観客の歓声が響き渡る中、2人のガンプラファイターは固い握手を交わすのだった。

「それでは、彩渡商店街ガンプラチーム、タウンカップ優勝を祝して！
かんぱーい！」

「かんぱーいつ！」

グラスやジョッキが打ち鳴らされる音が、彩渡商店街の小料理店

「みやこ」に響いた。

戸には、「本日貸切」の札が下がっている。

今日の大会の祝勝会のための、店主のナツメ・ミヤコの計らいだつた。

「ウチは1日くらい休んでも問題ないから」

とは、当の店主の弁である。

「ははっ、繁盛店があるのは良いねえ。ウチの店もミヤコのところに商品卸せてなかつたら、とつくなれでらあ」

精肉店を営むマヂオは早速ビールで満たされたジョッキを空にしながら、豪快に自分の店の現状を笑い飛ばした。

「……ミヤちゃん、うちの店の商品も扱つてくれないかなあ」

「ガンプラって食べられるの？ 衣をつけてカラツと揚げてみる？」

冗談を飛ばし合う大人たちを眺めながら、ヒカルは手近にあつた串カツに無心に齧り付いていた。

『旨い。』

ちなみに、ハムさんはこの場にはいない。なんでも、外せない用事があるということで、大会後にひと足先に帰ってしまったのだ。

「祝勝会に参加できんのは口惜しいが、私とて人の子だ。先約を反故にはできん。楽しんでこい」

そんな言葉を言い残して、ハムさんはさつそと自分の車に飛び乗つて去つてしまつたのだ。

「しかしすげーな、優勝なんて立派なもんだよ」

マチオはすでにジヨツキに2杯めのビールを注ごうとしている。いつの間に一杯目を空けていたらしい。それを見たミサがお酌するよ、とビール瓶に手を伸ばす。

「まだ一番小さな大会だし……これからだよ」

「そうだね……課題も見つかつたし、先も長い。もつと頑張らないとな」

ヒカルが会話に口を挟むと、ユウイチがなにかに気づいたようにポンと手をたたく。

「……おつと。ミサ、チームメイトに皆さんを紹介しなさい」

「そうだつた！」

ミサは慌てて座り直し、姿勢を正す。その場にいる一人ひとりを手で指し示しながら、紹介をしていく。

「こつちの男の人、肉屋のマチオさん。コロッケが美味しいからぜひ寄つてみて。それと、こつちの女の人が、この居酒屋のオーナー、ミヤコさん。この料理、全部ミヤコさんが作つたんだよ」

「おう、よろしくな！ 普段の晩飯に困つたらうちにおまかせだ！」

「よろしくね！ 今後も祝勝会とか、壮行会があつたら連絡をくださいな」

ミサの紹介に合わせて、2人がヒカルに声を掛ける。ヒカルは、

「あ、ども、これからお世話になります」と慌てて頭を下げた。

「えつと、チトセ・ヒカルです。この度この彩渡商店街チームのメン

バーになりました、よろしくおねがいします」

ヒカルが自己紹介をする。

「うんうん、ヒカルくんは我がチーム期待のルーキー！　今日も大活躍だつたんだよ！」

「活躍つてほどでもなかつたけど……さつきも言つたとおり、反省点も多々あつた」

ミサのおだてに苦笑しながら、ヒカルはバツが悪そうに頭を搔く。
「その上、ウチの店でも期待のルーキーだね。彼が来てからガンプラの売り上げが好調なんだ」

ユウイチがさらに続ける。

事実、ユウイチが経営する模型店の売り上げはこの1週間で徐々に上向いていた。というのも、店にやつてくるガンプラ目当ての客に対して、ヒカルが機体特性やバトルでの活かし方を解説しているのが、口コミで広まり始めていたのだ。もつとも、元いた世界で運用されていたモビルスーツの運用特性なので、こちらの世界でのガンプラバトルではどこまで活かせるのか、内心疑問ではあるのだが、客の反応を見るに、大きな変化はないらしい、とヒカルは踏んでいた。

「へえ……そいつあすげえや。ホントにうちの商店街の救世主じゃねえか」

「そんな大それたものでも……」

と、ここでなにかに気づいたようにヒカルは顔を上げた。

「……でも、やっぱり今の彩渡商店街はかなり危うい状況なんですね」「昔はもつとお店あつたんだけどね……」

しんみりとミサが答えるが、すぐに頭を振る。

「あ、でもでも、私達が頑張れば、また昔みたいに賑やかな商店街になるよ！」

「そななるといいわねえ」

「期待してるぜ、お前達！」

責任重大だなあ、と呟きながらも、ヒカルはミヤコやマチオの言葉に頷いてみせた。

と、その時、居酒屋の戸が開き、皆が等しくそちらを見やる。

「邪魔するよ」

「すんません、遅れました！　あと、ツレも1人いるつす」

入ってきたのは、鎖賀那亜仁魔流連合のリーダー、シドウ。そしてハイムロボティクスの技術者、カドマツだった。

「あらシドウ君、いらっしゃい！　いいのよ、まだ始まつたばかりだし。お連れの方もどうぞ？」

ミヤコが立ち上がると、急いで2人分の小皿を取つてくる。

「シドウ……それに、カドマツさんも！　一体どうして？」

「ああ、大会終わつた後打ち上げやるつてミヤコさんから聞いて、せつかくだから顔を出そうと思つたのさ。俺の家は商店街からちよつと離れたとこの町工場なんだが、よくこここの冷蔵庫なんかのメンテをしたり、軽トラ出して仕入れ手伝つたりしてんのよ」

「で、ウチの会社はシドウ君の町工場とも懇意にして貰つてる仲なんだ。今回はちょっと彩渡商店街チームの諸君に話があつたんで、シドウ君に頼んで連れてきてもらつた、つてわけさ」

ヒカルが目を丸くしていると、シドウとカドマツがそれぞれ事情を説明する。

「うちに？」

「ああ。実はな、君らのチームに入れてもらおうと思つてな」

その突然の申し出に、ミサとヒカルは顔を見合わせる。

「え……なんで？　自分のチームは？」

「お前らに負けて、今シーズンはもうやること無いんだよ」

それに、と言葉を続ける。

「この商店街チームは、この地元代表になつたわけだろ？　同じ地元

同士、我がハイムロボティクスも力添えを、つてわけさ」

ユウイチがそれを聞いて、ふむ、と考え込む。

「それはスポンサーになつてくれる……ということですか？」

「あー、資金面じやなくて、このチーム、エンジニアいないでしょ。俺がチームエンジニアを引き受けますよ」

カドマツの弁はこうだ。リージョンカップ以上の大会では、基本的にエンジニアを擁するチームが多くなつてくる。そのため、チーム工

ンジニアの不在が今後の大会で大きく響くことになる。そのため、ハイムロボティクスが技術面での支援をする、という話が出た。

「でも、うちにはチームエンジニアを雇う余裕は……」

「あー、そこはうちの社長にも話を通してあります。というか、社長も乗り気でした。交換条件として、ちょっとどうちが抱えてる案件に協力してもらう、つてことで」

それに、カドマツは続ける。

「個人的に、おたくのエースファイターに興味がある。覚醒システムを使いこなすだけじゃなく、その操縦スキルに戦闘のセンス。とんでもない逸材が身近にいたとあつちや、俺も血が騒ぐってもんだ」

ヒカルを見据えて、カドマツが言う。もともとエースは私なんだけどなあ、とぶつくセ言うミサを見て、ヒカルはようやく自分のことが、と気がつく。

「……えっと、僕に?」

「ハムさんからも話を聞いてね」

「いつの間に!」

ミサが仰天する。

「ああ、実はそつちのエンジニアを引き受けるって話、ハムさんからも提案があつてね。俺もおんなじこと考えてたからハムさんから頼まれた時は驚いたし、なんかスマーズに話が進むな、と思つたら、ハムさんがうちの会社の重役に予め根回ししてたらしい……いやー、相変わらず仕事早えなあの人」

「ハムさん一体何者なのさ!?

ミサの絶叫が、夜の居酒屋に木霊した。

ちよつと夜風にあたつてくる、と断りを入れ、ヒカルは一旦中座して店の外に出ていた。先に外に出て、電子タバコを吸っていたシドウと目が合う。

「お? お前もタバコか?」

「まさか、未成年だよ僕は」

「そりやそうか」

はは、と軽く笑うと、シドウは一口電子タバコを吹かす。紫煙代わりの蒸気ミストが夜の商店街の空気に溶けていった。

「つたく、すげえもんだよお前は。俺たちが3年かけても準優勝止まりだつたあのタウンカップで優勝しちまうんだからな」

「課題も山積みだけどね」

シドウの呟きに、肩をすくめるヒカル。シドウはそんなヒカルをちらりと見て、ふつと息をつく。

「お前なあ、もうちつと喜べよ。スカした態度も結構だがな、お前に負けた俺たちが浮かばれねえだろうが。もうお前はウチの地区の代表なんだぜ？ 堂々としねえと他所の街の連中にナメられちまうだろうが」

「（忠告）でも、まさにその通りなんだ。リージョンカップを勝ち上るには、もつと僕たちは成長しないといけない」

「そこは同意だ。ミサはともかくとして、お前は経験が浅い。二ツパー握つて1週間ちよいだそうじやねえか」

こういうタイプは結構珍しいんだがな、とシドウはぼんやり呟く。「バトルセンスはピカイチだ。戦略を練る頭もある。とつさの機転も効く。モビルスーツの知識もある。その上覚醒使いだ。それだけに、工作技術、その経験が凄まじく浅いのがマジで勿体ねえ」

ふむ、とヒカルは考え込む。

「カドマツさんがウチのチーム入りするのって、つまり……」

「ああ。カドマツさんとハムさんの考えはこうだ。エンジニアが入りや工作部分でフォローが効く。より高度なアセンブルも出来るようになるつてわけだ」

ファイターに取つちやこんなに羨ましい話ねえぜ、とシドウは遠くを見ながら話し続ける。

「もつともそれでも限界はあるけどな。エンジニアが関わるのはあくまでアセンブルシステムだ。カドマツさんはビルダーとしてもある程度アドバイスできる知識はあるつて言つてたが……それでもお前自身が工作の経験を積まねえといけねえ。最終的に手を動かすのはお前自身だからな」

「だよなあ……」

気持ち肩を落とすヒカル。そんな彼に、でも、とシドウは続ける。
「実のところ、そんなに心配してねえんだ。模型店でバイトしてるんだろ？」

「まあ、そうだけど」

「ガンプラバトル続ける上でその選択は大正解だ。プラモの事をより深く知るなら模型店がうつてつけだからな。プラモだけじゃなく、工具に塗料も扱って、制作ブースもある。ガンプラ作りには何が必要で、何が大事になってくるのか、だんだんわかつてくるはずだぜ」

確かに、とヒカルは頷く。

「実際、接客しながらプラモの話を聞いたりしてるから……色々とかつてきたことがあるしね。昔は今みたいにアセンブルするのが簡単じゃなくて、ジョイントの改造が必要だつた……なんて話もお客様から聞いたよ」

「ガンプラバトルが始まつて以来、既存のガンプラは順次ジョイントが統一されていつてるからな。手脚や頭、バックパックの交換が自由自在に出来るようになつた……もつとも、対応していないガンプラもまだまだ多いんだが」

「それに、可動域の調整やパーツの補強、後はスミ入れに塗装……ガンプラは作り方が簡単だからこそ奥が深いと実感させられる」

ヒカルの言葉に、その感覚だ、とシドウは頷いた。

「その感覚を忘れるな。その感覚を忘れなければ、きっとお前はビルダーとしても一流になれる。世界を獲るのも夢じやねえさ」

そろそろ戻るか、とシドウは踵を返し、店内に戻っていく。

ヒカルは頷き、その後に続くのだつた。

それから数日後のこと。

一見すると、買い物メモと買い物かごという、夕方の主婦のような格好で、ヒカルは自らが働く模型店を闊歩していた。

ガンダムサイファーの改造プランがある程度まとまつたのだ。この買い物は、そのためのパート探しである。

「ふむ、その様子だといよいよ改修の日処が立つたと見えるな、少年」
ちようど来店してきたハムさんが声をかけてくる。

「あ、いらっしゃいハムさん。ちようどシフト上がりだつたので……」「もうじきミサの学校は下校時間か。後は……カドマツが来れば全ての準備が整うな」

「今日はアセンブルシステムのアップデートでしたつけ」

「ああ、いよいよだ……刮目するが良い、少年。アセンブルシステムが変われば、まさに世界が一変するぞ」

ハムさんは大仰に手を広げてみせる。と、買い物かごの中身を見て、ほう、と息を漏らした。

「その買い物の内容を見るに……どうやら正当進化といった趣か」「現在の方向性をそのまま維持するのが、一番やりやすいですからね。特定の能力に特化させてしまうと、ガンダムサイファーの本来のコンセプトが崩壊しますし」

「その通りだな。初志を貫徹する、良いことだ」

完成が楽しみだ、とハムさんは頷いた。

買い物を終え、工作ブースでパーツ部分の組み立てをしていると、ミサが帰ってきた。

「ただいまー……おつ、ヒカルくん早速やつてるねえ」

「おかげり。改修プランがまとまつたんだ。カドマツさんが来る前に仮組だけでも終わらせておきたくて」

「それならヤスリがけとか手伝うよ。こうやってまたチームメイトとプラモ作りができて嬉しいなあ」

結構強いし、設備や資金に文句言わないし、とミサは満足気に言いながら、600番の紙やすりを探し始めた。

「相当困らせられてたんだな、カマセのワガママに」

苦笑しながら、ヒカルは手を休めない。しばし作業を続けていたが、ふと何かに気づいたように顔を上げる。

「あ……そう言えばミサの方はアザレアに何か手を入れたの?」「ふふん、よくぞ聞いてくれました」

ミサはヤスリがけを終えたパーツを手渡すと、近くの棚からガンプ

ラの箱を持つてくる。

「これぞ、新たなアザレア……アザレア・カスタムだよ！」

芝居がかつた調子で、ミサはガンプラの箱を開ける。

「おおー……おお？」

ヒカルは首を傾げた。

（どこが変わったんだ？ 見た目からだとわからないんだけど……）

「……うん、まあぱつと見変わらないよね」

ヒカルの心中を察し、どこか曖昧な笑みを浮かべたミサは、脚部を指差す。

「ミサイルポッドをくつつけてみたんだよ。今までジャイアント・バズとマシンガンだけだつたから、手数を増やそうと思つてさ」

「あー……ザクIIのJ型が付けてたやつか！」

合点がいった、とヒカルは頷く。

「そうそう！ これでもつと射撃戦に寄せて戦うことができるよ」

「そうか、パーツを外付けっていうのも有りなのか……それならこつちはこうだな」

ヒカルは、追加パーツをさらに装着させる。外付けのパーツはテープで仮止めを行つた。

「……よし、こんなのでどうだ」

まだ仮組段階だったが、ひとまずの完成を見たガンダムサイファー。

そのシエルットは大きく変貌を遂げていた。

腰にザクが使用するクラッカーを取り付け、脚部には使い捨てのロケットランチャー、シュツルム・ファウストを据え付けた。さらに、シールドはこれまでのターンAのものから、ガンダムXのディバイダーに変更。そして、バックパックはI W S Pからノワールストライカーへ換装した。それも、ただのノワールストライカーではなく、ビームキヤノンと6連装ミサイルポッドを追加で装着している。クラッckerのすぐ脇には、ホルスターに収められた拳銃のように、ビームライフルショーティが吊られていた。

「すごい、どの距離も守備範囲だ……」

「遠距離にいる敵をシユツルム・ファウストとビームキャノンで焼り出す。数が多くても、6連装ミサイルとハモニカ砲で一網打尽にできるしね。近づいてきた相手をビームライフルショーティとレールガンで翻弄しながら、隙を見てフラガラッハとGNソードの三刀流で仕留める……って感じだね」

と、そこへハムさんとカドマツが顔を覗かせる。いつの間にかカドマツが来訪する時間だつたようだ。

「追加パーツは結構だが……」

「何か忘れていませんか、つと」

ヒカルは慌てて、カドマツとハムさんが座る椅子を持つてきた。

「すみません、カドマツさん。お出迎えもできなくて」

「別にんな大層な事しなくてもいいよ。で、追加パーツを装備として認識させるために、アセンブルシステムをアップグレードする必要がある。そのままだと追加パーツはただの飾りだ。こつちは早速アツブグレード作業を始めるが、終わつたらテストするから、ガンプラの仕上げを頼んだ」

カドマツはそう言うと、店に備え付けてあるガンプラアセンブルシステムに自分のノートパソコンを繋げる。電源をいれると、キーボードを叩き始めた。

「承知しました」

「りょーかいっ」

ミサとヒカルはそれぞれ答えると、パーツの接着・塗装を始めた。アザレアの方はミサイルポッドの塗装と接着だけだったので、ミサは自分の作業をさつさと終わらせると、改修箇所の多いガンダムサイファーの方の仕上げを手伝う。

「うーん、今までよりもトリックキーな機動ができるそうだね……バトルシステムで試したいなあ」

「前よりも三次元機動が上がるはずだよ。あくまで机上論だから、実際に動かしてみないことには……だけどね」

やがて、パソコンのキーを叩いていたカドマツが顔を上げる。

「よし、追加パッチインストール完了。最適化もしておいた。二人の

ガンプラを寄越してくれ

ミサとヒカルはカドマツに言われたとおり、各自のガンプラを差し出す。アセンブルシステムの3Dスキャナに読み込ませて、それぞれのガンプラバトルシミュレータのアカウントを呼び出すと、アップグレードした機体データを読み込ませていった。

「んじゃ、データ入力に入るぞ。機体名を入力してくれ

カドマツはミサにノートパソコンの前の席を譲る。ミサは目の前に座ると、「アザレア・カスタム」と機体名を入力した。そしてヒカルの番が来る。

「新しい名前を考えておいた」

ヒカルは一人呟く。

「ガンダムサイファー、最初は本当にゼロからのスタートだった。でも、そこから今は1歩前に進んだんだ。だから、こう名付ける」

ヒカルは、力強い視線を画面に注ぎながら、新たな機体名を入力した。

ゼロからの前進。

その名は——「ガンダムサイファー・アドバンス」。

Chapter 2 Gundam Cypher

Advance

第10話 KNIGHT

新たに改造を施した機体を手に、ヒカルたちは早速実戦でのテストを行うつもりだった。

だが、いざ出かけようとする前に、カドマツが待ったをかける。

「おつと、ちょっと待っててくれ。報酬の話を今のうちにしておきたい」

「今日までありがとう。私カドマツさんの事忘れない」

報酬と聞いて、ミサの目から光が消失する。吐くセリフも実に感情がこもっていない。

「別に金払えって訳じゃない……こないだも言つたろ？ 仕事手伝つてもらうつて」

カドマツは苦笑しながら、模型店の入り口を見やる。ちょうどハムさんが、外に停めていた車から大きなジユラルミンケースを運び込んできたところだった。

「それなんだがな、カドマツ。私もその仕事とやらの詳細を聞いていいない。彼らに出来る範囲の仕事なのか？」

「ハムさんの言うとおりだよ。ハイムロボティクスのお手伝いなんて理工学系の知識が無きや無理でしょ」

「ロボットの技術関連となると……本当に僕らがやれることって限られますよ？」

ハムさん、ミサ、ヒカルはそれぞれ首を傾げながら顔を見合わせる。カドマツは「心配すんな」と言いながら、ジユラルミンケースのロックを解除した。

「まずはこいつを見てくれ。話はそれからだ」

ジュラルミンケースの中に収められていた中身を見て、3人はそれぞれ息を呑む。

「ガン……」

「ダム……？」

騎士のような鎧に身を包む、二頭身のプロポーションのガンダム。

知る人ぞ知るその名こそ——

「騎士ガンダムだ！」

ミサが声を上げた。

「えつ……これロボット？ この中世風味のガンダムが！？」

「あれ、ヒカルくん騎士ガンダム知らない人？」

ミサは意外だ、と言わんばかりにヒカルの顔を見る。

「ＳＤガンダムっていうのはなんとなく知ってたけど……」

「よし少年。今度私がリマスター版の映像ソフトを貸してやろう。それとスパロボBXもだ。騎士ガンダムの基礎教養を積んでおけ」

「なんで持ってるのさハムさん」

「ふつ……何故かな……」

と、話が逸れかけたところで3人は自然と再びジユラルミニンケースの騎士ガンダムに視線を戻す。電源が入っていないのか、カメラアイに当たる部分は光っていない。

「こいつはウチで開発中のトイボットだ。こいつの運用テストに協力してほしいんだ」

「玩具用ロボットか……こんなのが買える時代になつたんだねえ」
ミサは感慨深く呟く。その言葉を聞いて、ヒカルは改めてとんでもない世界だ、と思う。

ヒカルの世界にも、愛玩用のロボットはある。「ハロ」や「トライ」といったものだ。だが、モビルスーツを2等身に縮めて騎士のようなキャラクターにした上、それをハロのような愛玩ロボットにしてしまう、そんなこの世界の文化に軽いカルチャーショックを覚えずにはいられなかつた。

（まあでも……ガンダム自体がテレビアニメになつてゐるから、こういうのも出てくるか……）

と、ヒカルは自分に言い聞かせて、ひとまず自分を納得させた。
「実際に売り出すのはもう少し先だがな。テストで合格できなきゃ、商品化は無理だ」

「テストつて、私達は何をすればいいの？」

「こいつの売りは、子供と一緒に遊んでくれることなんだ」

「ふむふむ……あ、これ取説だ」

カドマツの説明を聞きながら、ミサはジユラルミンケースの底にあつた取扱説明書の冊子を取り出し、ぱらぱらとめくる。

「ガンプラバトルも一緒にできる」

「ガンプラバトルが……凄いな」

「ほう……器用なものだな」

ヒカルとハムさんが驚嘆する中、ミサは騎士ガンダムの鎧の中をまさぐり、何やら操作している。すると、モーター駆動音が響き始めた。「新しいチームメンバーってことだ。次からシミュレータに入る時は、こいつも連れて行け……つて勝手に起動すんな！」

説明の最中に騎士ガンダムが起動したのを見て、カドマツは慌てたようにはミサにツッコミを入れる。

起動した騎士ガンダムの目に光が灯り、漫画のような瞳が表示される。どうやらディスプレイになつているようで、表情によつて表示が変わる仕組みらしい。

騎士ガンダムは立ち上がりると、辺りをキヨロキヨロと見回す。

「おおー、立ち上がった！　はじめましてロボ太！」

「勝手に変な名前を付けるなア！」

「いいじやんロボ太！　かわいいじやん、ねーロボ太！」

ど直球なネーミングにカドマツはツッコミを重ねるが、ミサはどこ吹く風とばかりに、騎士ガンダム——ロボ太に同意を求める。が、ロボ太は答えない。

「ああ……」いつ、言葉は理解できるけど、発声機能はついていないんだ

「なんで？」

「あくまでおもちゃであるためだ。人の近くにいるロボットの開発つてデリケートなんだよ。特にトイボットは、子供の成長にどんな影響が出るかわからないからな」

カドマツはロボ太が言葉を話さない理由を解説する。

人の身近に存在するロボット開発では、様々な点で考慮すべき課題

がある。その中のひとつで、カドマツが特に懸念しているのは、コンピュータの自然言語処理技術において発生しうる「ルーウエリン反応」だ。

これは翻訳ソフトやIME、音声認識などで誤った形で言語処理をしてしまった時に、人間側が極端な拒否反応を示すもので、とりわけ年少の子供にとつてはトイボットを「友達」とみなす上で意識的に障害となる。極端な話、そのトイボットに対し何らかの排斥行動——有り体に言えばイジメだ——が行われる可能性がある。子供の情操教育上、これは好ましくない。

ならば、いつそ自然言語処理を最低限に抑える、つまり「言葉を理解するが自分から言葉を発することはない」という形で解決を図ろう、というのがカドマツの考え方である。

「なんか、大人っぽいこと言つてる」

「大人だからな」

ミサが変なところで驚愕するが、カドマツはさらっと受け流した。これも大人の余裕ってやつか、とヒカルは苦笑いを浮かべていた。
「いいからさつことテストしてこい。上手く行けば、次のリージョンカップは3人で戦えるぞ」

カドマツはそう言うと、一行を送り出すのであつた。

早速いつものゲームセンターにやつてきた彼ら。ハムさんも「記録は私が引き受けた」と、一緒についてきた。

「ミサさん、ヒカルさん、ご来店ありがとうございます」

案内ロボットのインフオが声をかけてくる。と、同行していたロボ太がすつと前に進み出て、インフオと視線を合わせる。

「——はじめまして、ロボ太さんですね。記憶します」「なんで名前知ってるの!?」

ミサが愕然としてインフオに詰め寄る。

「今聞きました。光デジタル信号で、ですが」

「それは『聞いた』うちに入るのか?」

「まあロボットですから」

ヒカルのツッコミを軽く受け流すと、インフォはクレーンゲームの筐体に向かっていく。どうやら景品の配置を直している最中らしい。

「さて、油を売っている暇はないぞ諸君。やることはやらねば。私の方で、バトルログとビデオ記録を行おう」

ハムさんはガンプラバトルシミュレータのオペレータ席に座ると、携帯端末をかざす。

ガンプラバトルシミュレータでは、バトルの結果を記録として残すことが出来る。実際のガンプラファイター側では自分の映像記録が中心になるが、オペレーター側では客観視点での映像記録——第三者からの記録となる。今回はロボ太の試験も兼ねるため、ハムさんが記録を取つたほうが良いということになつた。

「念の為、こっちでも記録は取つときますけど……」

「そうだな、目は多いほうが良いだろう。記録、忘れんようにな」

ハムさんの準備ができるのを見計らつて、ヒカルたちはガンプラバトルシミュレータの筐体に滑り込んだ。

ガンダムサイファー・アドバンスを3Dスキャナに設置し、データを読み込ませる。

これまでの機体データから新機体に更新したためか、データのロードにやや時間を要した。と、ロードしていく機体データの中に、ヒカルは見慣れない表示を見つけた。

『Burst Type』に『Burst Breaker』……？『Burst Type』には『Assault』が設定されている……こんなのは設定した覚えがないな。『Burst Breaker』の方は、今のところ空欄か……なんだろこれ。後でカドマツさんに確認とるか……

ヒカルは首を傾げながら、操縦桿を握りしめた。機体データのロードが終わると、電腦空間上にガンダムサイファー・アドバンスの姿が映し出される。

「チトセ・ヒカル、ガンダムサイファー・アドバンス。オープニングバット！」

ヒカルは宣言と同時に、ブーストペダルを踏み込む。

ガンダムサイファー・アドバンスは大空を舞い……巨大な日本家屋の軒先に着地した。

「……え？ なんだこれ」

周囲に視線をやる。自身の機体よりも大きい石灯籠が近くにそびえ立ち、奥に見えるのは広大な枯山水。日本家屋も巨大で、まるで人の世界に迷い込んだような心持ちだった。いや、違う。正確には――。

「こつちがガンプラサイズなのか……」

『あー、今回このステージなんだ』

何かを察したかのようなミサの声。

いつの間にかミサとロボ太も出撃していたようだ。ミサのアザレア・カスタムの隣には、ロボ太の姿そつくりそのままの騎士ガンダム。ヒカルは、カドマツが出掛けにロボ太に何か持たせていたのを思い出した。どうやら、これがロボ太の機体のようだ。

『このステージは私が選んだ。さあ、存分に戦うが良い！』

ハムさんが高らかに宣言し、ミサは何かを察したようにすうつと息を吸い込む。

そして思いつきり、声として吐き出した。

『趣味か！』

『フハハハハ、趣味に走って何が悪い！』

ミサのツツコミを吹き飛ばす勢いの、ハムさんの高笑い。曖昧な笑いを浮かべると、ヒカルは操縦桿を握り直した。

「おしゃべりしてないで始めるよ」

『心得た』

ヒカルの声に反応する声。だが、ミサの甲高い声でも、ハムさんのテンション高めの声でもなく、落ち着いた中にどこか気高さを有する雰囲気の、男性の声が返事をする。

『……え？ 今、なんと？』

『どうしたミサ。私は『心得た』と返事をしただけだ』

通信ウインドウのアカウント名を反射的に確認したヒカルは、我が目を疑つた。

「……あんた、まさか口ボ太？」

《うむ》

ヒカルたちは一瞬絶句する。口ボ太が、言葉を発しないと言われていた口ボ太が。

《喋つたあああああああ?!》

ミサがその場にいた全員の思考を代弁して、絶叫した。

《……ああ、うむ。まずはそこから説明せねばならないか》

口ボ太はようやく、彼らが仰天する理由に気がついたようだ。

《私は今、シミュレータに合成した音声データを入力している。それがスピーカーから出力されている状態だ》

《で、でもカドマツさんが喋れないって》

《カドマツは发声機能がついていない、と言つただけだ。私のボディにはスピーカーが無い。シミュレータにはスピーカーがあるので、それに接続して外部出力を行えるようにしたのだ。ガンプラバトルというものは、チームで行うものだ。コミュニケーション手段が無ければ不都合だろう?》

口ボ太の見解に、ハムさんがむう、と唸る。

《確かに、口ボ太の言うことには一理あるな。よし、準備はいいか諸君。間もなく敵が出現するぞ》

《うむ。さあミサ、そして主殿。油断せずに進もう!》

主殿、と言われて最初は誰かわからなかつたヒカルは、一瞬首を傾げたが、今実際に、この場でともに戦うのは、ミサと自分と口ボ太だ。すなわち、自分のことだと理解する。

「わ、わかつた……参つたな、そういう風に呼ばれたの初めてで……」

《ちよつとお、なんでヒカルくんが主殿で私は呼び捨てなのお》

ヒカルの困惑とミサの抗議に、口ボ太はふむ、と一言漏らす。

《私はカドマツがインプットしたデータに従つてているだけだが》

《カドマツううう!!》

この場にいないカドマツに対しても恨みの声を上げるミサ。だが、そ

うこうしているうちにNPC機体が続々と出現する。

気持ちを切り替えて、ヒカルは目の前の敵機群と相対する。ステー

ジはやや広めの日本庭園とは言え、周りを高い塀で囲われており、実質閉所での戦闘となる。

(あまり動き回れそうにないな……高低差が激しいから、横移動よりも縦移動か)

ガンダムサイファー・アドバンスが地面を蹴る。跳躍後、スラスターを噴射して高度を取つた。眼下に敵機体群が映る。ヒカルは數と種類を見極めた。

「アストレイのグリーンフレームが6、レッドフレームが4、ブルーフレームが4……なんだこれ、アストレイだらけだ」

『グリーンフレームで足を止め、そこをレッドフレームとブルーフレームで叩いてくると推測できる。主殿、レッドフレームにガーベラ・ストレートが装備されている、おそらく敵方のメインアタッカーはレッドフレームだ。なお、こちらの武装はナイトソードと電磁ランスだけだ、ブルーフレームが仕掛けてくる遠距離戦は分が悪い』

ロボ太は機体構成から瞬時にN P C 敵機の戦術を看破しつつ、ヒカルが欲しいと思つていた情報を即座に伝えてくる。

その分析能力に舌を巻きつつ、ヒカルは2人に指示を出す。

「グリーンフレームの目をこつちに引きつける。隙が出来たところを、ロボ太が攻撃。ミサはロボ太のバックアップを頼む、ブルーフレームを騎士ガンダムから引き剥がしてくれ」

『了解!』

『心得た!』

ガンダムサイファー・アドバンスが空中から飛び出した。コンソールで確認する限り、加速度、最高速の実績値はI W S Pを装備していた時以上だ。

（ノワールストライカー、流石の機動力だ。I W S Pの改良型つて触れ込みだけはあるな……ちょっと、アレ試してみよう）

ヒカルは着地のタイミングでペダルを軽く蹴る。

グリーンフレームたちの遙か手前で着地したガンダムサイファー・アドバンスは、地面を再び蹴つて跳躍した。タツチアンドゴーの要領で、再び飛翔する。

そのまま、ヒカルは操縦桿を大きく倒し、トリガーを引き絞った。機体がバレルロールしながら、両手のホルスターからビームライフルショーティを引き抜く。僅かな時間の間に狙いをつけ、そのまま連射。目にも留まらぬ早業は、さながら西部劇の早打ち自慢のガンマンか、ハリウッド映画のガン＝カタ使いだ。

『これが噂に名高い『マワール』……当時のガンダムゲーマーたちを魅了したあの技か』

『連ザⅡだつけ……大昔のゲームであつたよね』

ハムさんとミサが、そのダイナミックなマニューバに感嘆の声を漏らす。

ビームライフルショーティの連射を受けたグリーンフレーム隊は、襲撃の主であるガンダムサイファードに注意を向け始める。そこへ、さらに追い打ちをかけるようにレールガンが放たれた。

1機が直撃を受け、その身を散らす。グリーンフレーム隊はガンダムサイファード・アドバンスを脅威と認めたらしく、ツインソードライフルを構えて次々に迎撃する。

その瞬間、グリーンフレーム隊と、レッドフレーム・ブルーフレーム混成隊は距離を離した。

「今だ！」

『ようし！ 行くよロボ太！』

『うむ！ 援護は任せた！』

アザレア・カスタムの脚部ミサイルポッドから、6発のミサイルが一度に飛び出す。

先行していたレッドフレームたちは、ミサイルの着弾を嫌い、足を止める。

『そこだ！ 取つたアツ！』

この機を逃すはずもなく、騎士ガンダムが接近してナイトソードを振るう。鮮やかな剣筋による奇襲に対応できず、レッドフレームの1機が手傷を負う。ブルーフレームが慌てて援護に入ろうとするが、

『やらせないよ！』

ミサがマシンガンを浴びせ、ブルーフレームの注意を引きつける。

レッドフレームとブルーフレームはさらに分断された。

『す……い、アセンブルシステム変えるだけでここまで変わるものなんだね……カマセ君が環境にこだわる理由、なんかわかる気がする』「なるほどな……ハムさんが『世界が変わる』と言つていたけど、本当にその通りだ。これまで以上に世界が広がつたな」

新たに生まれ変わった機体を駆りながら、2人は「出来ることが増える喜び」を味わっていた。

そうして機体の挙動を試しながら戦闘を続けていると、やがてアストレイたちは各個撃破され、全滅する。

と、乱入のアラートが鳴る。対人戦が始まるようだ。

『他プレイヤーとマッチングされたようだ。さあ、実戦で暴れてこい！』

『了解！』

『R o g e r !』

『心得た！』

激励するハムさんに、三者三様に返答する。

目の前に現れたのは3機だ。隊長機はゴッドガンダムを素体としたカスタム機。ただし、上半身を武者頑駄無に換装し、腰にガーベラ・ストレートを吊っている。

脇を固める2機のうち、1機はギャンのカスタム機。使用されているパーツはローズガンダムやローゼン・ズールと、見事に薔薇づくしだ。

さらに1機は、カプールのカスタム機。だが、脚部をガンタンクに改装し、塗装も迷彩。ガンタンクの脚の上にカプールがちよこんと乗つかつている状況は流石にシユールだつた。その上、カプールのモノアイに当たる箇所から何故か砲塔が生えていた。

『おお！ あれに見えるは彩渡町タウンカップ優勝チームではないか！？』

通信ウインドウが3つ開いた。3人とも女性のようだが、そのうちの1人から熱い視線が注がれているのを感じる。

『恐れながら申し上げます！ 敵機体、事前の情報と武装が異なる模

様！ さらに不明な機体が1機……SD騎士ガンダムです！』

『騎士ガンダムだと!? ほう……騎士ガンダムのパイロット！ 聞こえるか！』

3人の女性のうち、瓶底のように分厚い眼鏡をかけた女性が、眼鏡の位置をしきりに直しながら報告する。と、それに反応したのが金髪ツインテールの、ひときわ鋭い目つきをした女性だった。

『騎士ガンダムのパイロットは私だ！』

それに応えるロボ太。と、相手は目を丸くした。

『パイロットも騎士ガンダム……だとつ!? 貴様、まさか騎士ガンダムそのものだとでも言うつもりか!?』

『ロボ太、ここは期待に応えてやつてくれまいか』

相手が驚愕するのを他所に、ハムさんがチームチャット回線でロボ太にそつと耳打ちする。

『よ、良いのか？ 私はただのトイボットなのだが……』

『ふつ、あの女性の目を見てみろ。期待に満ちているではないか。トイボットならば、応えてやつても良いのではないか』

『しょ、承知した……ぬう、嘘をついているようで気がひけるのだが……』

ロボ太は困惑していたようだが、やがて意を決して進み出た。

『如何にも！ 私の名はガンダム！ その風体、さぞ名高き騎士とお見受けする！』

『その名乗り……やはり騎士ガンダム殿！ 我が名はキシモト・ミキ！ 練馬タウンカップ優勝、チーム・クロノクイーンが一人、『薔薇の姫騎士』ミキである！ 戦場でこうして見えたのも運命、我がローズ・シュヴァリエと手合わせ願いたい！』

時代がかつたやり取りが繰り広げられる中、苦笑した相手チームのリーダーが通信越しに話しかけてくる。機体名は「頑駄無御前」。『あつはつは……すまないね、ああなつてしまふとミキはどうにも止まらない。』挨拶が遅れてしまったが、我々は練馬代表、チーム・クロノクイーン。私はリーダーのフジワラ・シズカだ。『白百合の女武者』、などと呼ばれている。さて、どうだろう彩渡商店街チームの諸

君。ここで会えたのも何かの縁だ。我々と君たちそれぞれ1人ずつで、1対1のタイマン勝負と行かないか?』

ヒカルは頷いた。

「彩渡商店街チーム、チトセ・ヒカル。そのお誘い謹んで受けましょう。よろしく頼みます、皆さん」

『誘いを受けてくれたこと、感謝する! では……私は君に挑戦しよう、ヒカルくん』

『自分はそこのアザレアに宣戦布告であります! タウンカップでの援護ぶりは自分も拝見しております! 感服仕切りでしたとも!』
シズカに続いて、瓶底眼鏡の女性はびしつ、と指を指しながら宣言する。

『が、ガンタンク……ヒカルくん、交代しない?』

「しない。指名されているんだから、応えてあげないとでしょ?』

『ぐぬぬぬぬ……えーいわかつた! 矢でも鉄砲でも持つてこーい!
!』

一応抵抗してみたが、ヒカルに正論で押し切られ、ついに開き直ったミサ。

1対1のタイマンバトル、3本勝負が幕を開けようとしていた。